

土地履歴調査（宮崎地区）

調査成果の利活用事例集

平成 29 年 3 月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

 **注意** ! 必読のこと!

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。

実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。

本「調査成果の利活用事例集」で使用の成果図面およびその他の図について

本事例集では、使用している図の名称は<>で括り、引用元の説明は小文字で図名、またはページの下部に記載しました。文章の引用元の説明についても同様にしました。

各図の詳細については以下のとおりです。

- ①「土地利用分類図 1902 (明治 35 年)」「土地利用分類図 1968 (昭和 43 年)」成果図は、各時期の旧版地形図を元に分類を行いました。背景の地図は 2 万 5 千分 1 の最新地形図を使用しています。そのため、本事例集の中で使用している各年代の<土地利用分類図>は、判読が容易となるように背景の地図を明治期、昭和期の分類に使用した旧版地形図を使用しています。
- ②成果図では自然地形分類に人工地形分類を斜線・格子などの模様で重ね合わせていますが、本事例集では判読が容易となるように、人工地形分類のみ着色した<人工地形分類図>を使用しています。
- ③<標高区分図>については、国土地理院の基盤地図情報(数値標高モデル)5m メッシュ(標高)データを使用し、地形の起伏を強調して表示できるように着色設定を行い使用しています。
- ④「宮崎を襲った 5 つの災害」の枠囲み内の被害数は、現在の宮崎市全域の集計数です。7 ページの年表は当時の宮崎市の集計数を示しており、現在の宮崎市に含まれる旧市町村については、水害統計を基に旧市町村ごとに集計しました。統計数値のないものについては記載していません。
- ⑤<宮崎市洪水ハザードマップ>については、宮崎市 総務部危機管理局危機管理課ホームページ「宮崎市洪水ハザードマップ」の「宮崎市洪水ハザードマップ」(PDF ファイル)を使用しています。
- ⑥<宮崎市防災マップ<清武町域>>については、宮崎市 総務部危機管理局危機管理課ホームページ「宮崎市洪水ハザードマップ」の「宮崎市防災マップ<清武町域>」(PDF ファイル)を使用しています。
- ⑦<宮崎市津波ハザードマップ>については、宮崎市 総務部危機管理局危機管理課発行の宮崎市津波ハザードマップ(冊子)の津波浸水想定区域図(最大浸水分布図)を使用しています。
- ⑧<宮崎県土砂災害警戒区域等マップ>については、宮崎県県土整備部砂防課ホームページ「宮崎県土砂災害警戒区域等マップ」の「土砂災害警戒区域等」から画像作成したものを使用しています。
- ⑨ P8 は、成果図では日向灘地震としていますが、宮崎では外所地震の呼称が広く知られているため、本事例集では外所地震と記載しています。
- ⑩ P10、P11 は宮崎市教育委員会文化財課ホームページ「宮崎市の文化遺産 ガイドブック」のガイドブック PDF ファイルを基に作成しています。

※本事例集のために撮影した写真には、撮影日が示してあります。



注意

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。

必読のこと

※「明治 35 年=1902 年」、「昭和 43 年=1968 年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものです。

宮崎地区の利活用事例

注意 本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用にあたっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のもです。
※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情復、第1411号)」

1 人の手による土地の改変

市街地の拡大やゴルフ場などの開発により、地形がどのように変化したのかをみましょう。

- 1 宅地造成による市街地の拡大
- 2 ゴルフ場などの開発による地形の変化
- 3 中心市街地の広がり

2ページ

2 砂丘と丘陵に挟まれた宮崎

特徴的な地形の成り立ちをみましょう。

- A 日向灘と並行して伸びる砂丘の列
- B かつての大淀川の旧河道
- C 低地に広がるかつての湿地

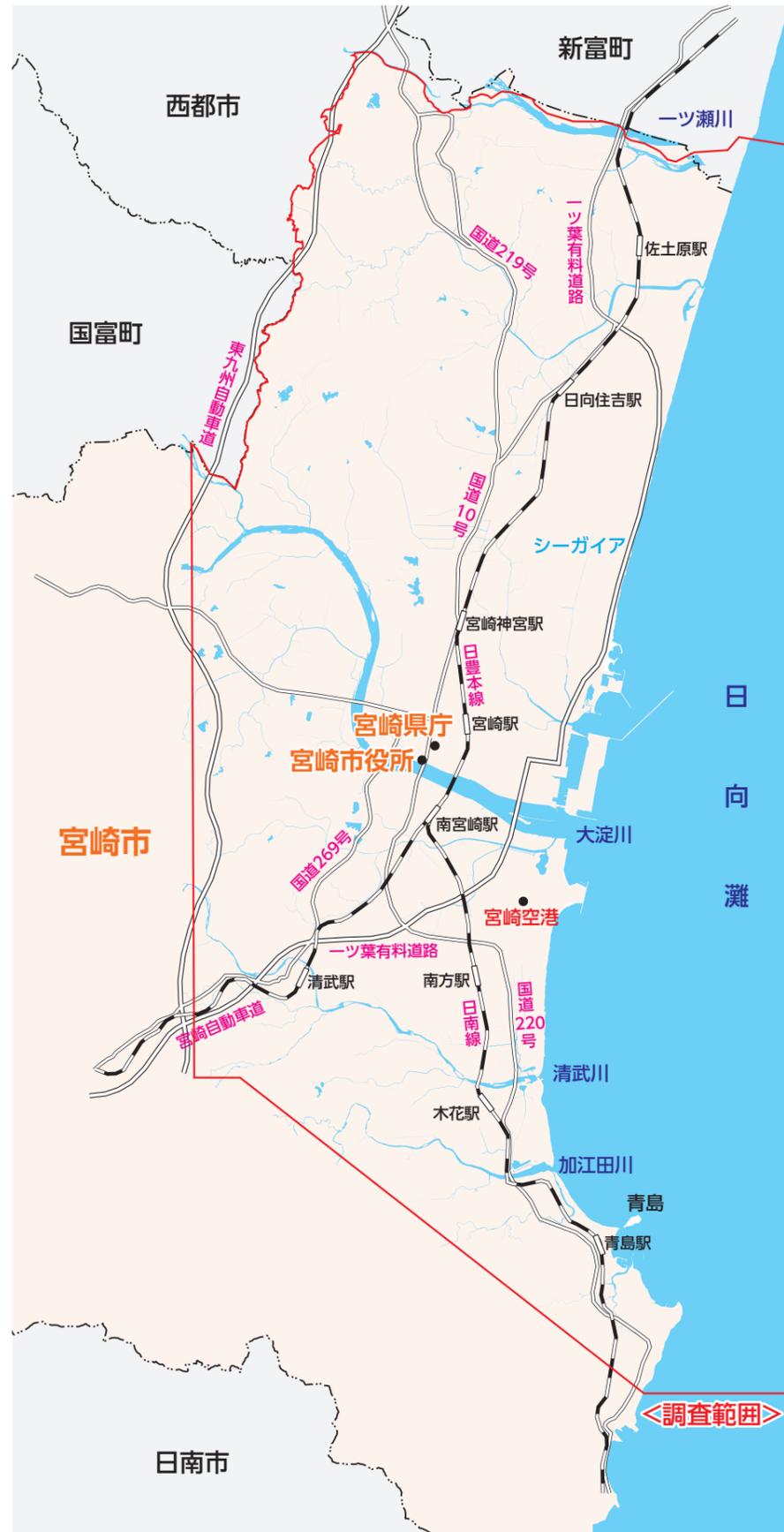
4ページ

3 土地利用の移り変わり

水田や森林だった土地が、市街地へ変わっていく様子を、3期に分けてみましょう。

- A 森林から畑地への利用
- B 旧河道部分から市街地への利用
- C 湿地から水田への利用

5ページ



4 宮崎を襲った5つの災害

過去の災害を水害、土砂災害、津波災害の順に見てみましょう。

- 1 日豊本線を襲った「清武川大洪水」 昭和14年
- 2 豪雨による水害 平成13年
- 3 かつてない規模となった台風14号の災害 平成17年
- 4 近年の土砂災害 平成13年～平成28年
- 5 前代未聞の大災害となった外所地震による津波被害 寛文2年

6ページ

5 外所地震の津波被害から農地復興のあゆみ(熊野地区)

大きな被害を受けた土地の復興を追いかけます。

9ページ

6 古墳の分布

宮崎に多く残る古墳は、どのような土地に作られたのかをみましょう。

10ページ

7 水運の中心から空の玄関口へ(赤江地区)

水運の中心地だった赤江地区の変化を、戦前から戦後までを比較します。

12ページ

8 旧河道、旧水部と災害の関係

災害の影響を受けやすい地形を知っておくことでその地形の安全性を知ることができます。

13ページ

1 人の手による土地の改変

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。

※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。

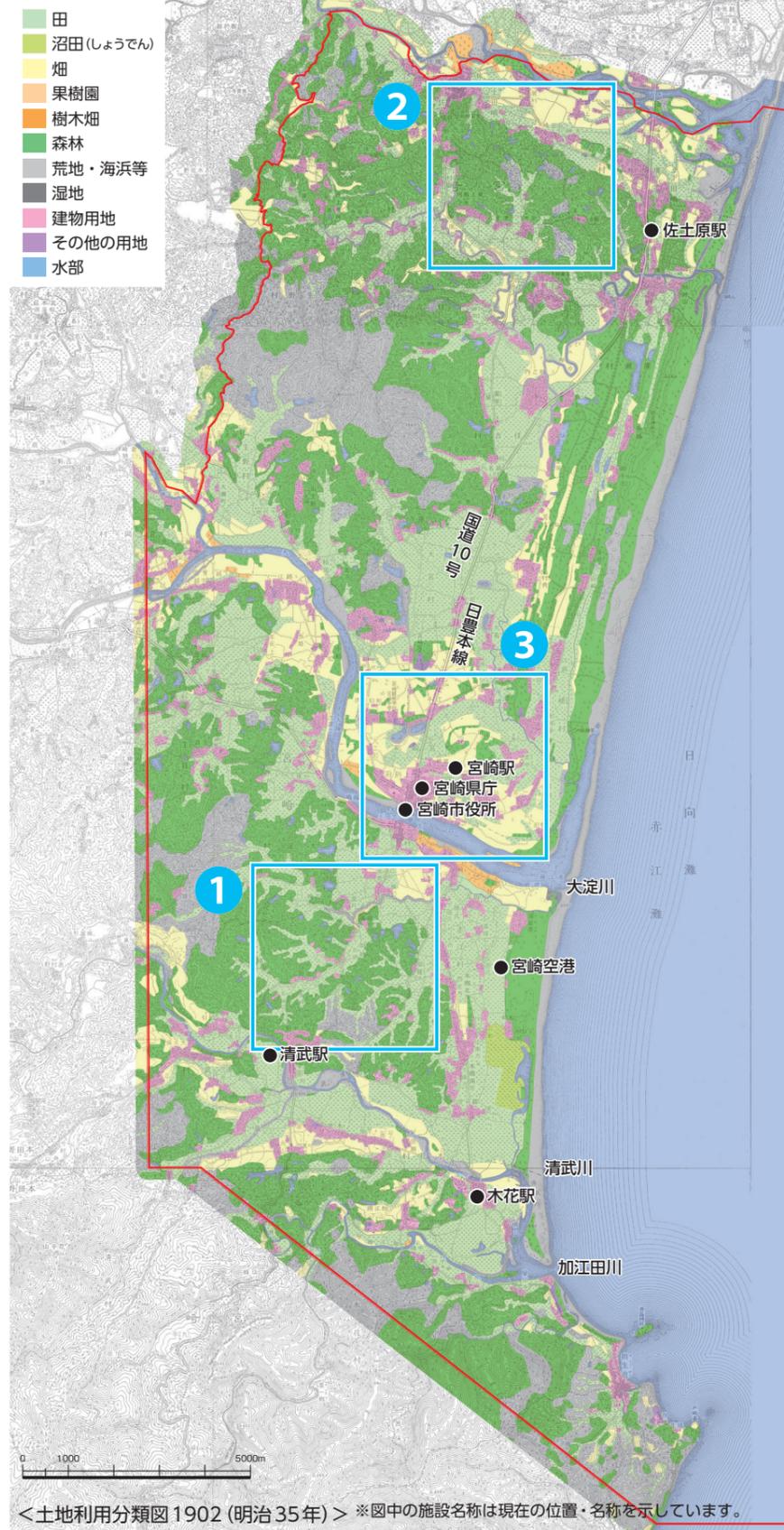
※「この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000（土地条件）及び基盤地図情報を使用した。（承認番号 平28情使、第1169号）」

※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。（承認番号 平28情複、第1411号）」

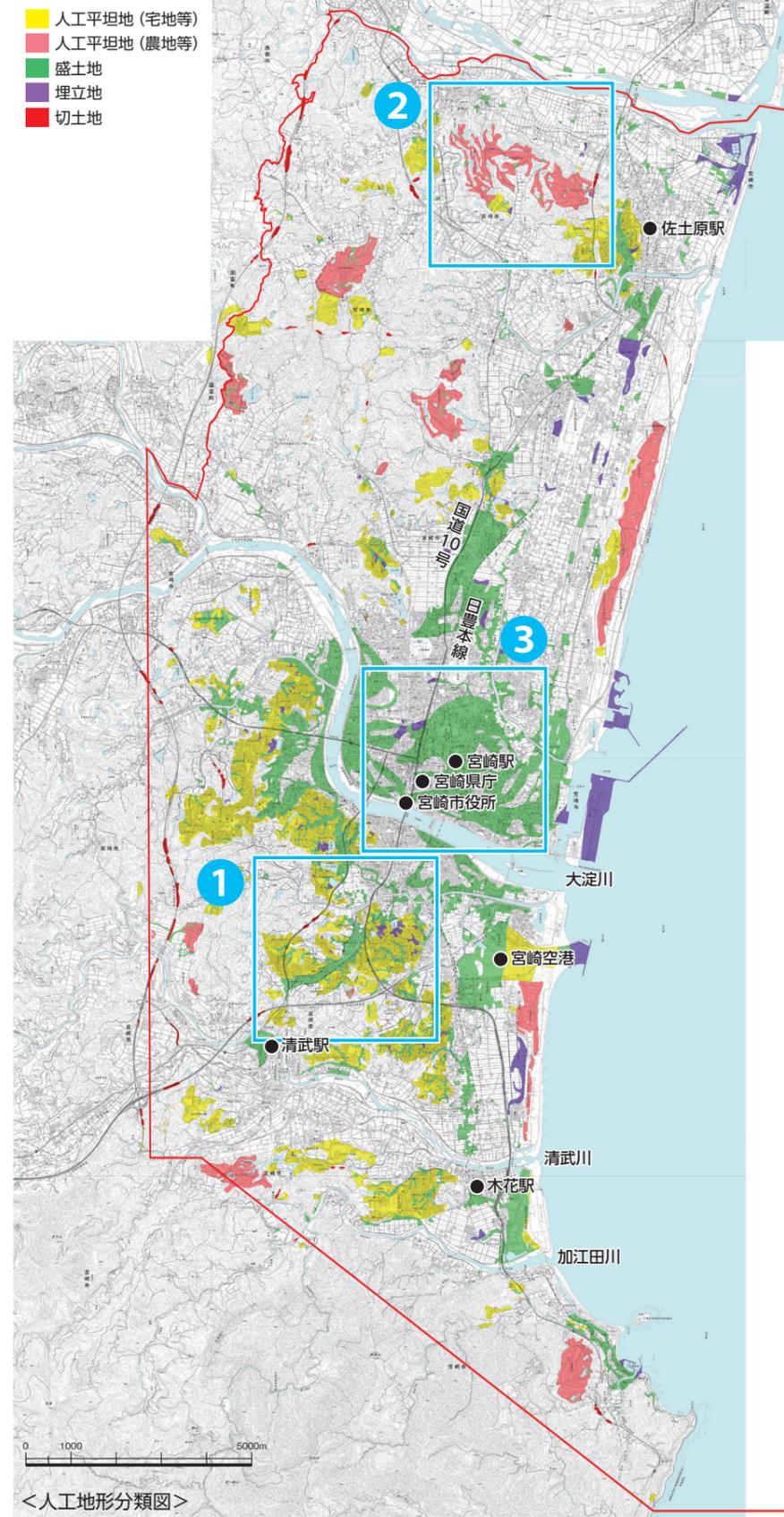
※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図（タイル）を複製したものである。（承認番号 平29情複、第191号）」

注意
必読のこと

●土地利用分類図から110年前の土地利用を知ることができます。



●人工地形分類図から開発の状況を知ることができます。



●現在の航空写真から土地の様子を見ることができます。

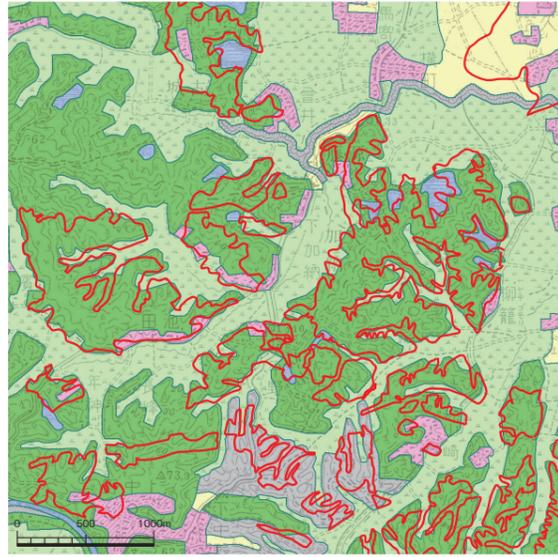


本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
 ※「この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000（土地条件）及び基盤地図情報を使用した。（承認番号 平28情使、第1169号）」
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。（承認番号 平28情複、第1411号）」
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図（タイル）を複製したものである。（承認番号 平29情複、第191号）」

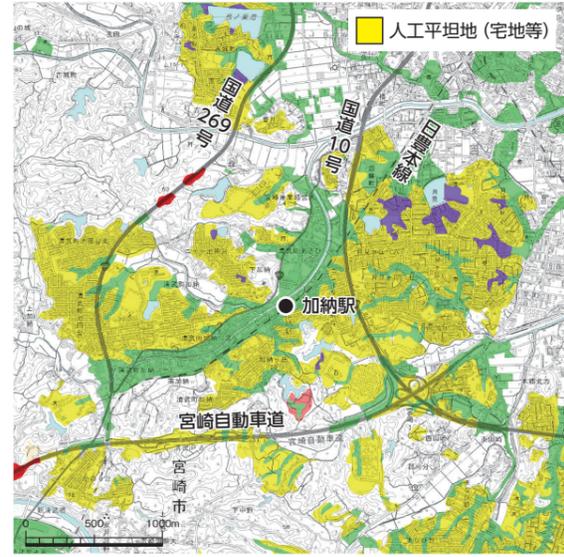
注意
 必読のこと

1 宅地造成による市街地の拡大 (清武地域の宅地造成地)

宮崎市の人口は、昭和40年代になると20万人を超えます。それに伴い、森林や一部の農地が宅地造成により住宅地に変わりました。
 大塚台、江南地区のある中央南地域も昭和50年頃に宅地化が進み、その後も各地で徐々に広がっていきました。



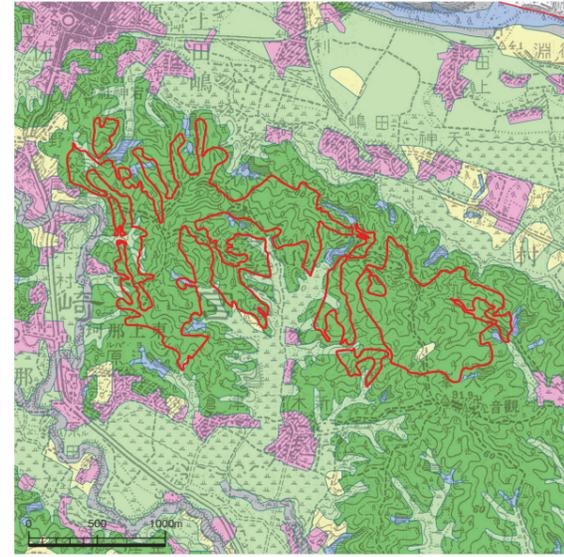
<土地利用分類図 1902 (明治35年)>



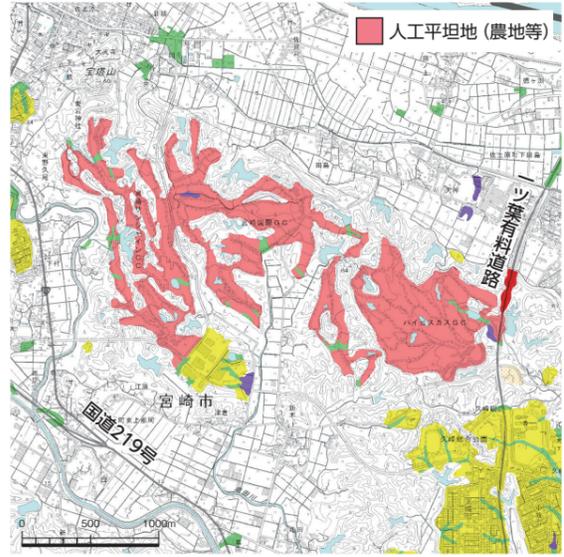
<人工地形分類図>

2 ゴルフ場などの開発による地形の変化 (佐土原地域のゴルフ場造成地)

温暖な気候で、南国の雰囲気味わえるなど、市内には人気のゴルフ場が多数あります。有名な大会が開かれているゴルフ場や、歴史あるゴルフ場も人気ですが、海沿いのゴルフ場は日向灘や松林を、丘陵地のゴルフ場はその景観などをセールスポイントにしており、地形とゴルフ場も密接な関係があります。特に、台地や丘陵地のゴルフ場はもともとの起伏を利用しながら作られました。



<土地利用分類図 1902 (明治35年)>



<人工地形分類図>

3 中心市街地の広がり (中央地域の盛土地)

宮崎市の市街地は、拡大が進む中で水田などの周辺より低い土地を盛土して、住宅地等を広げていきました。



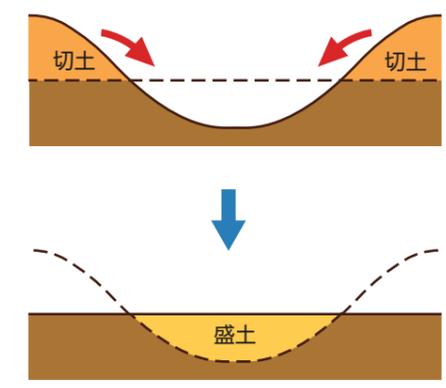
<土地利用分類図 1902 (明治35年)>



<人工地形分類図>

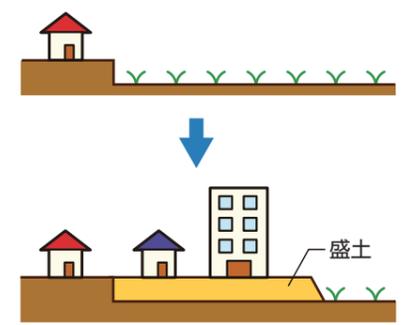
人工平坦地とは

地面の高い所を削り、低い所を埋めることで平らにし、建物を建てやすいように工事された土地のことです。人工地形分類図はその変化部分を表示しています。



盛土地とは

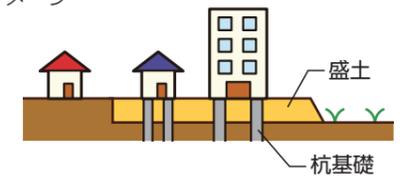
地面の低い所を、他から運んできた土などを盛って平らにし、建物を建てやすいように工事された土地のことです。



●盛土地の安全性について

盛土地は、地震の時に揺れが大きくなったり、液状化や地盤沈下の恐れがあります。土地の成り立ちを知り、対策を行うことで安全性を確保できます。

◆杭基礎で対策した場合のイメージ



2 砂丘と丘陵に挟まれた宮崎

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。

※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。

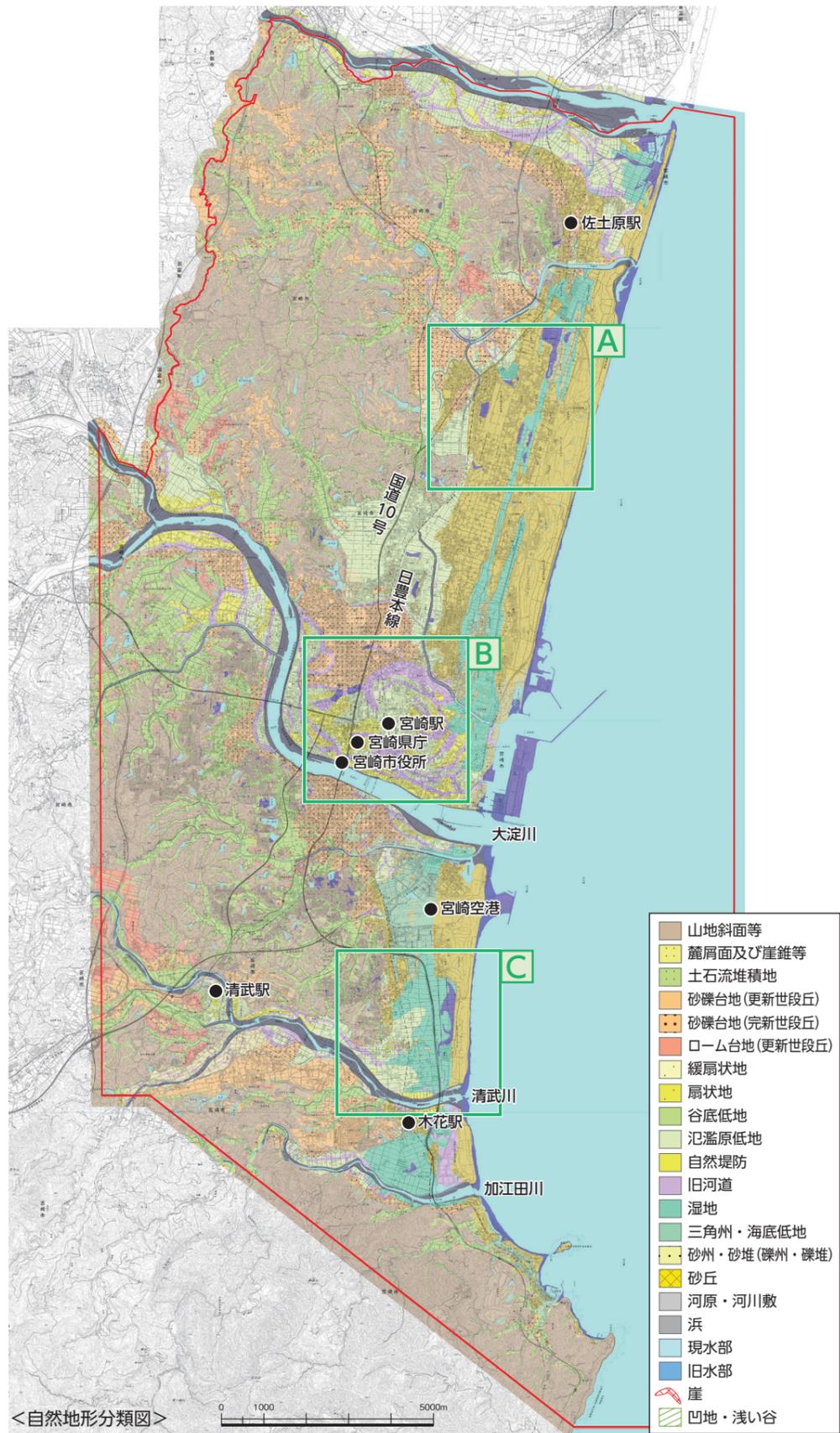
※「この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000(土地条件)及び基礎地図情報を使用した。(承認番号 平28情使、第1169号)」

※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情使、第1411号)」

※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情使、第191号)」

※「この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基礎地図情報を使用した。(承認番号 平29情使、第177号)」

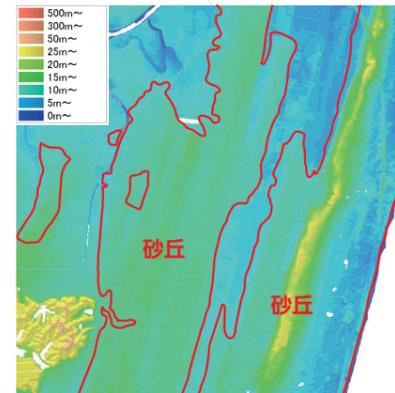
注意
必読のこと



A 日向灘と並行して伸びる砂丘の列



< 自然地形分類図 >



< 標高区分図 >

国土地理院「基礎地図情報(数値標高モデル)5mメッシュ」より作成

宮崎地区の海岸には日向灘と平行して伸びる砂丘があります。この砂丘は、自然地形分類図を見ると広範囲に及んでいることがわかります。

一般的には、砂丘と聞くと砂でできた丘をイメージしますが、110年前の土地利用を見ると、宮崎地区の砂丘は森林に覆われていることがわかります。(5ページのAを参照)

現在では宅地や農地、リゾート地に転換されています。

砂丘とは

海からの風によって運ばれた砂が、長い年月をかけ徐々に積み上げられて形成される丘のことをいいます。宮崎地区では標高約25m以上になるところもあります。



B かつての大淀川の旧河道



< 自然地形分類図 >

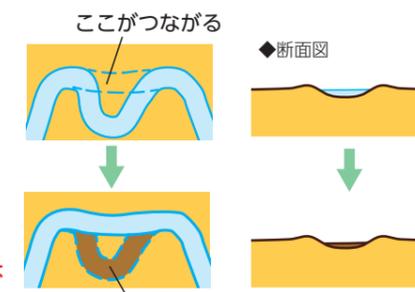


< 土地利用分類図 1902(明治35年) >

旧河道は徐々に埋まっていますが、現在でも周囲よりわずかに低く、軟弱なことが多いため、豪雨時に浸水したり、地震の際に揺れが大きくなったりすることがあります。

旧河道とは

現在川は流れていませんが、以前流れていた川の跡を旧河道といいます。大淀川などの大きな川は、長い年月をかけてその流れを変えています。



旧河道の安全性については13ページへ➡

C 低地に広がるかつての湿地



< 自然地形分類図 >



< 土地利用分類図 1902(明治35年) >

砂丘と砂丘の間の低地は、湿地となっているところがあります。古くから水田として利用されており、湿地の姿を残してはいません。

水田に適した地形を活かし、コシヒカリやヒノヒカリなどの米の栽培が盛んです。

湿地とは

自然堤防や砂州等の背後に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない、元は沼や沢だった土地のことをいいます。

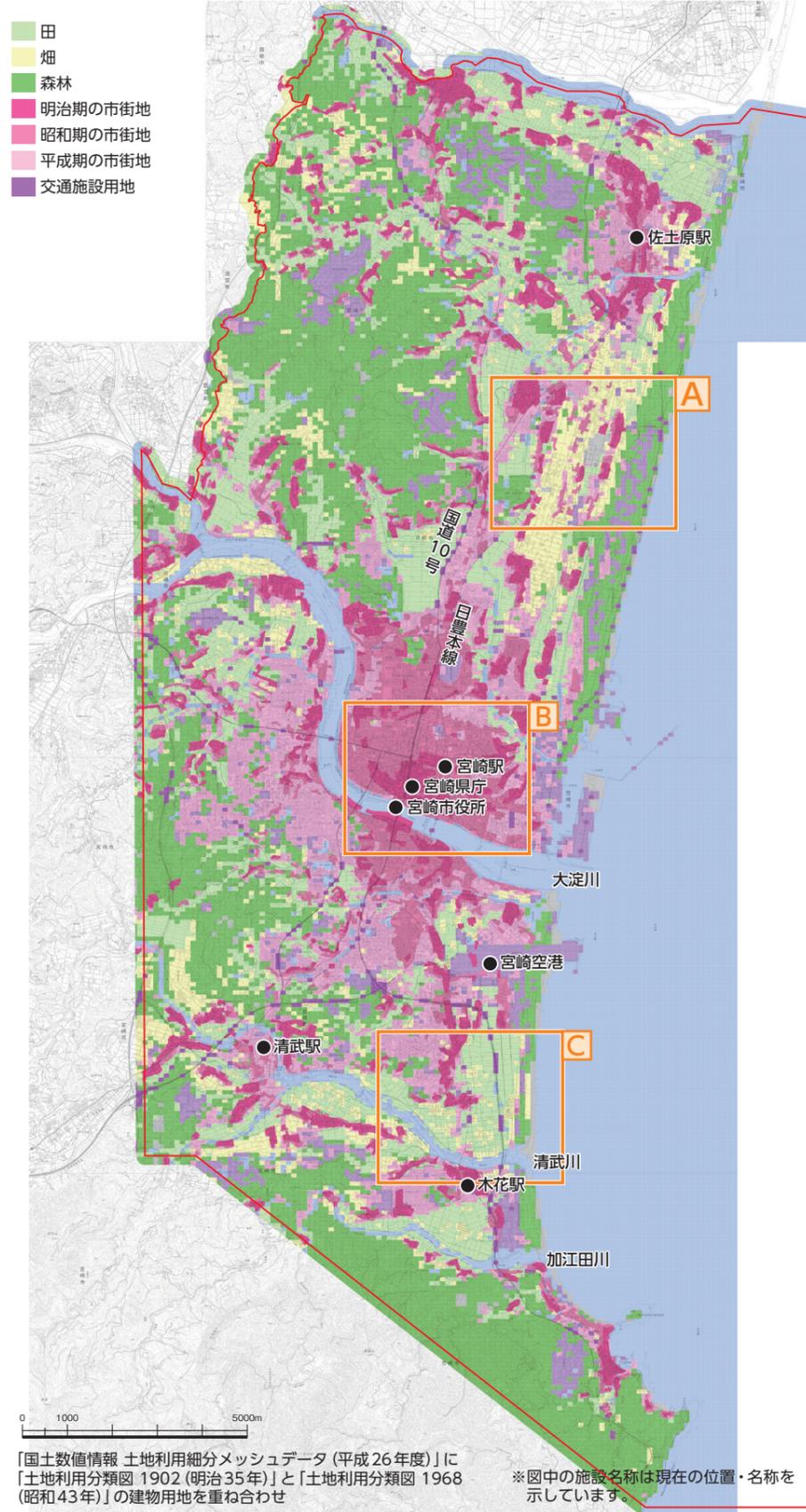


3 土地利用の移り変わり

注意
必読のこと

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情複、第1411号)」
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情複、第191号)」

●この図は3時期の建物用地を重ね合わせたものです。



「国土数値情報 土地利用細分メッシュデータ(平成26年度)」に「土地利用分類図 1902(明治35年)」と「土地利用分類図 1968(昭和43年)」の建物用地を重ね合わせ
 ※図中の施設名称は現在の位置・名称を示しています

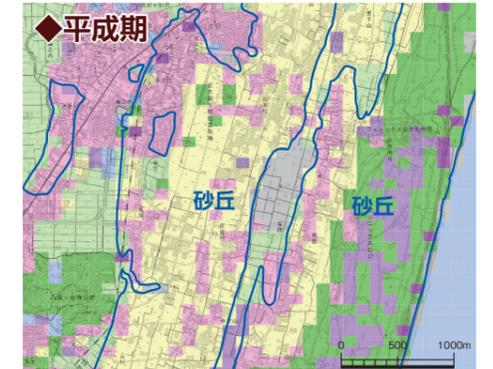
A 森林から畑地への利用



砂丘全体に広がっていた森林は、大淀川より北では畑地へと大きく変化しました。



現在でも畑地として利用され、キュウリ、ピーマン、トマトなど促成栽培用のビニールハウスが多く見られます。



B 水田から市街地への利用

※図中の青色線は旧水部も旧河道の一部になっているため、旧河道の範囲にまとめて示しています。



明治期に点在していた集落は、昭和期にはその集落を取り囲むように、旧河道部を含む田畑が市街地として広がっていました。



平成期になり、昭和期に水田だった土地も市街地へと変化し、国道や鉄道沿線沿いに拡大しました。旧河道の安全性については13ページへ →



C 湿地部分の水田利用



明治期には図中の上部に沼田が確認できますが、その他の土地は水田として利用されており、昭和期も同様です。



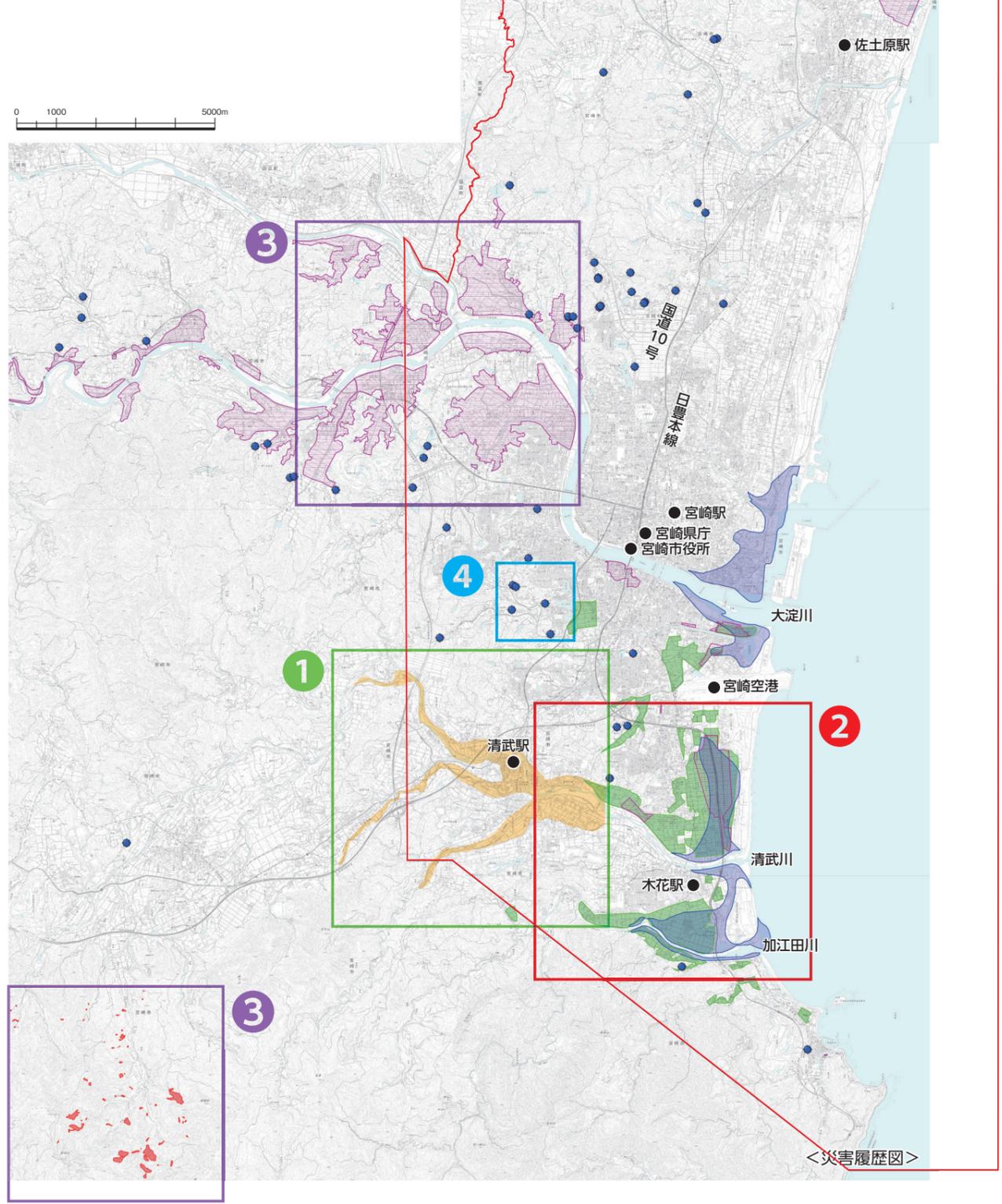
平成期を見ると、湿地部分は隣接地まで市街地化されているのに対し、そのまま農地として多面的な利用が進められています。



※明治期：土地利用分類図 1902(明治35年)、昭和期：土地利用分類図 1968(昭和43年)、平成期：国土数値情報 土地利用細分メッシュデータ(平成26年度)

4 宮崎を襲った5つの災害

- 昭和14年台風水害による浸水域
- 平成13年豪雨による浸水域
- 平成17年台風14号による浸水域
- 平成17年台風14号による崩壊発生箇所
- 平成13年～平成28年における土砂災害発生箇所
- 寛文2(1662)年の日向灘地震の津波による推定浸水域



注意
必読のこと

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものです。
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情復、第1411号)」
 ※「この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基礎地図情報を使用した。(承認番号 平29情使、第177号)」

1 日豊本線を襲った「清武川大洪水」 昭和14年

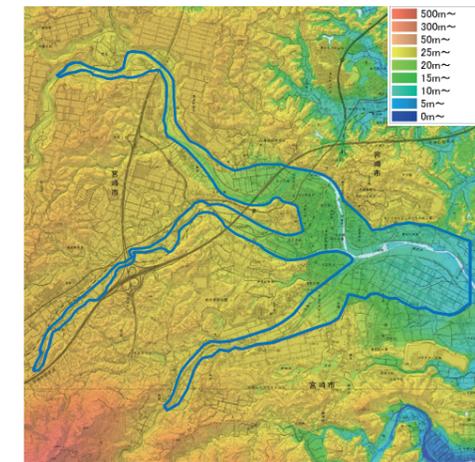
降雨により清武川流域では土砂流の発生による堤防決壊が起きたために、家屋が流失して溺死者32名を出す大災害となりました。
 さらに橋梁流失46ヶ所、堤防決壊76ヶ所などの大きな被害となった他、日豊本線では線路築堤の崩壊や鉄橋流失の被害を受けています。

1939(昭和14)年10月15日～16日
 死者：32名
 田畑の埋没、流出：100ha など

宮崎市「地域防災計画」・総務省統計局「水害統計」より



<災害履歴図>

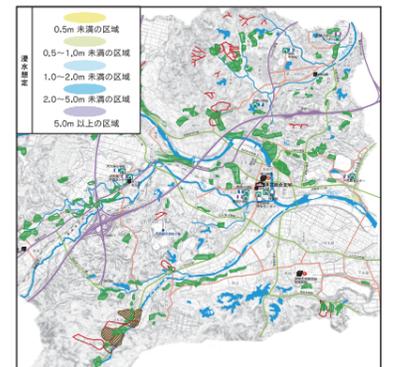


<標高区分図>

国土地理院「基礎地図情報(数値標高モデル)5mメッシュ」より作成

【参考】

宮崎市作成の防災マップもご確認ください。



<宮崎市防災マップ(清武地域)>
 宮崎市「宮崎市防災マップ(清武地域)」より

2 豪雨による水害 平成13年

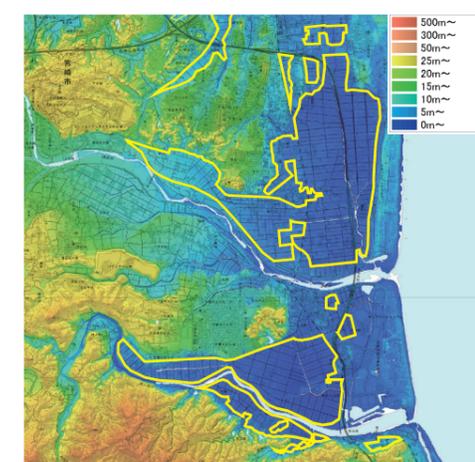
1時間あたり30mmを超えるような激しい雨が長時間続き、平野部を中心に浸水害や崖崩れが発生しました。また、冠水で道路が通行止めになるなど、交通機関も寸断されました。特に木花地域周辺は局地的な豪雨で、総雨量が500mmを超えたところもありました。

2001(平成13)年10月16日～17日
 床上浸水：13戸
 床下浸水：93戸 など

宮崎市「地域防災計画」・総務省統計局「水害統計」より



<災害履歴図>



<標高区分図>

国土地理院「基礎地図情報(数値標高モデル)5mメッシュ」より作成

【参考】

宮崎市作成の洪水ハザードマップもご確認ください。



<宮崎市洪水ハザードマップ>
 宮崎市「宮崎市洪水ハザードマップ」より

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情使、第1411号)」
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情使、第191号)」
 ※「この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基礎地図情報を使用した。(承認番号 平29情使、第177号)」

注意
 必読のこと

3 かつてない規模となった台風14号の災害 平成17年

この台風は、大型で強く、遅い速度で北上したため長時間激しい雨が降り続き、県内各地で総雨量が1000mmを超える記録的な大雨となりました。宮崎市内では軽傷者のみでしたが、県内では13名の死者を出しました。

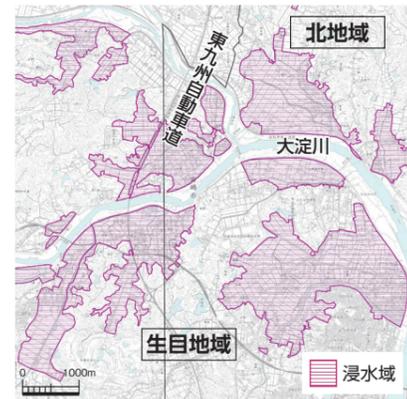
また、鰐塚山周辺では大規模崩壊が発生し、全体の崩壊生産土量は670万m³を超えると推定される程でした。これにより「わにつか渓谷いこいの広場」のバンガロー、テニスコート等のキャンプ施設が土砂に飲み込まれました。

現在この地区は、緊急時に住民が迅速に避難できるようワイヤーセンサー等が設置され、土砂移動が常時観測されています。

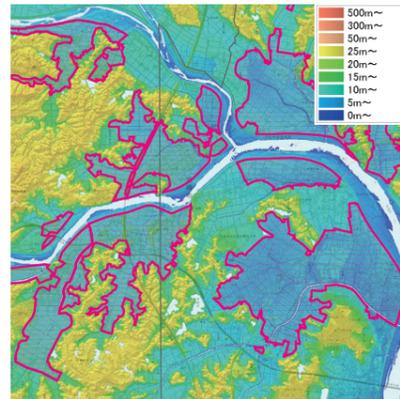
この台風により、農林水産業や道路などの被害額が1000億円を超えるなど、戦後の台風災害としては最大級のものとなりました。

2005(平成17)年9月4日~7日
 床上浸水：2369世帯
 床下浸水：689世帯
 全壊・流出：305棟 など

宮崎市「地域防災計画」・総務省統計局「水害統計」より



<災害履歴図>

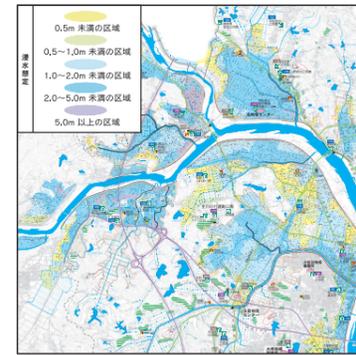


<標高区分図>

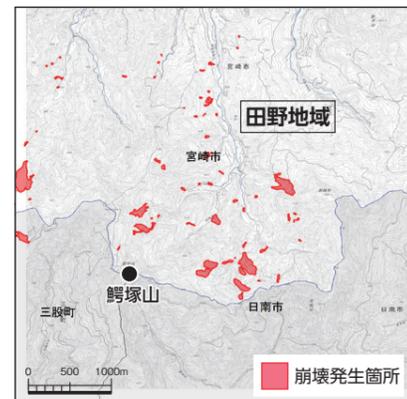
国土地理院「基礎地図情報(数値標高モデル)5mメッシュ」より作成

【参考】

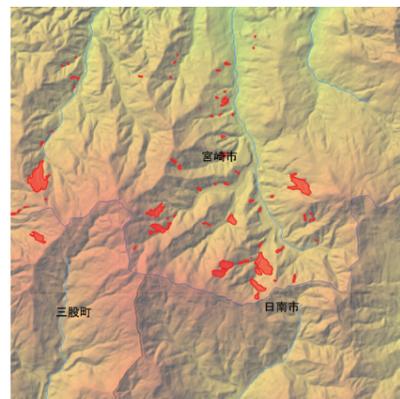
宮崎市作成の洪水ハザードマップもご確認ください。



<宮崎市洪水ハザードマップ>
 宮崎市「宮崎市洪水ハザードマップ」より



<災害履歴図>



<標高区分図>

国土地理院「地理院地図(地理院タイル)」より作成

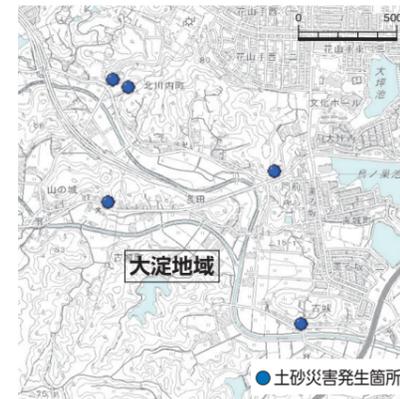


土石流発生状況(別府田野川)
 宮崎県「台風14号により発生した土砂災害」(2006.7)より

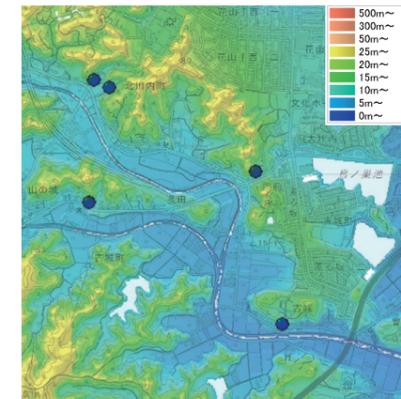
4 近年の土砂災害 平成13年~平成28年

宮崎市では、平野の西側の山地で崖崩れや崩壊、土石流などの土砂災害が度々発生しています。ここでは平成13年から28年までの土砂災害をまとめて掲載しています。

がけ下や溪流沿いなどにお住まいの方は、大雨の際や土砂災害警戒情報が発表された際には、早めの避難を心がける必要があります。



<災害履歴図>



<標高区分図>

国土地理院「基礎地図情報(数値標高モデル)5mメッシュ」より作成

【参考】

宮崎県作成の土砂災害警戒区域等マップもご確認ください。



<宮崎県土砂災害警戒区域等マップ>
 宮崎県「宮崎県土砂災害警戒区域等マップ」より

◆宮崎市で起きた主な風水害

発生日月	災害要因など	主な被害
1939(昭和19)年 10月15日~16日	清武川大洪水 (台風)	死者32名、田畑の埋没・流失100ha など
1954(昭和29)年 9月10日~13日	台風第12号	住家全壊6、半壊42、流失5、床上浸水916、床下浸水1869 など
1968(昭和43)年 9月24日~25日	台風第16号 (第3宮古島台風)	住家半壊8、一部破損41、非住家全半壊29、床上浸水671、床下浸水2479 など
1971(昭和46)年 9月20日~22日	台風第28号の影響を受けた 秋雨前線による大雨	住家半壊2、一部破損1、床上浸水498、床下浸水6544、非住家被害4 など
1990(平成2)年 9月28日~29日	台風第20号による大雨	旧宮崎市：床上浸水953棟、床下浸水2610棟、住家全壊1棟、半壊3棟、一部破損54棟 旧清武町：全壊・流出20棟、半壊2棟、床上浸水64棟、床下浸水227棟 旧田野町：床上浸水3棟、床下浸水50棟 旧佐土原町：全壊・流出1棟、床上浸水21棟、床下浸水108棟 旧高岡町：全壊・流出5棟、半壊2棟、床上浸水396棟、床下浸水303棟 など
3 2005(平成17)年 9月4日~7日	台風14号	旧宮崎市：軽傷者10名、床上浸水2058世帯、床下浸水403世帯、一部損壊112戸 旧高岡町：全壊・流出304棟、半壊540棟、床上浸水298棟、床下浸水245棟 旧佐土原町：床上浸水13棟、床下浸水41棟 旧田野町：全壊・流出1棟 など

被害は宮崎市「地域防災計画」による当時の宮崎市の値。旧町別の値は国土交通省「水害統計調査」による。

注意
必読のこと

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情復、第1411号)」
 ※「この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基礎地図情報を使用した。(承認番号 平29情使、第177号)」

5 前代未聞の大災害となった外所地震による津波被害 寛文2年

この地震は、日向灘を震央(東経132.0°,北緯31.7°)とする、M7.6のプレート境界地震です。発生当日に佐土原で40回もの余震が襲い、県内各地で多数の山崩れ、堤防破損、家屋被害等がありました。

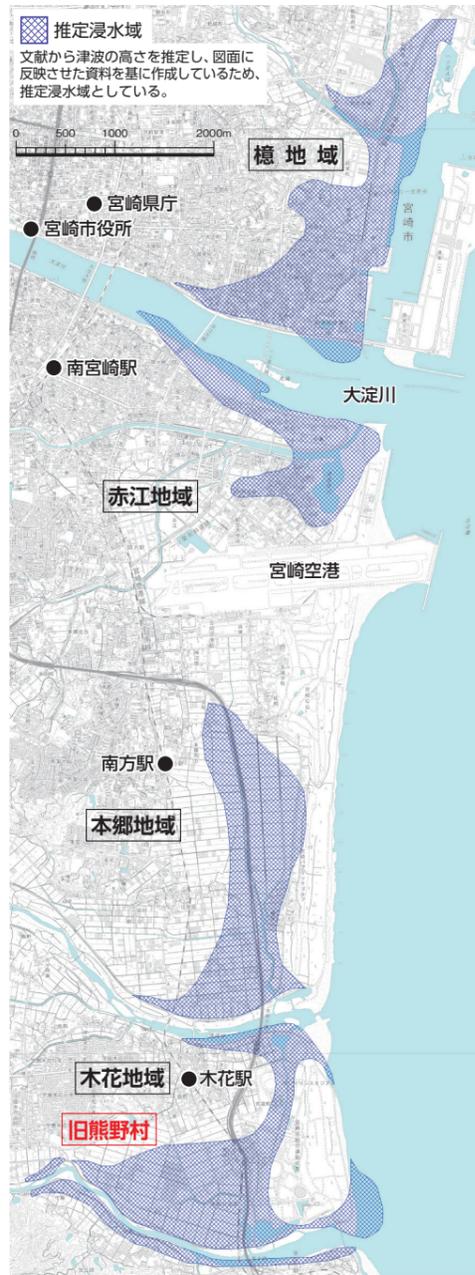
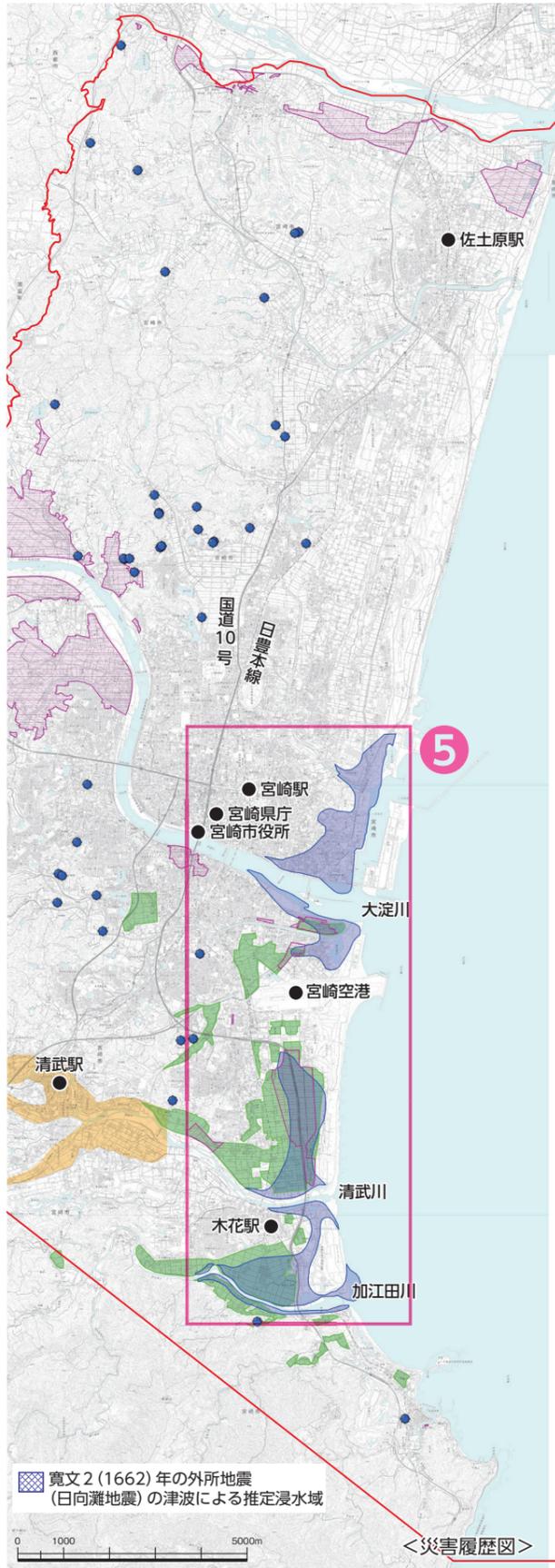
沿岸部では津波が発生し、多数の被害が出たほか、旧隈野村付近では0.9m~1.2mの地盤沈下があり、一帯が入り江となりました。

1662(寛文2)年9月20日
(旧暦:10月31日)
死者:200名(宮崎県内)
家屋全壊:3800戸 など

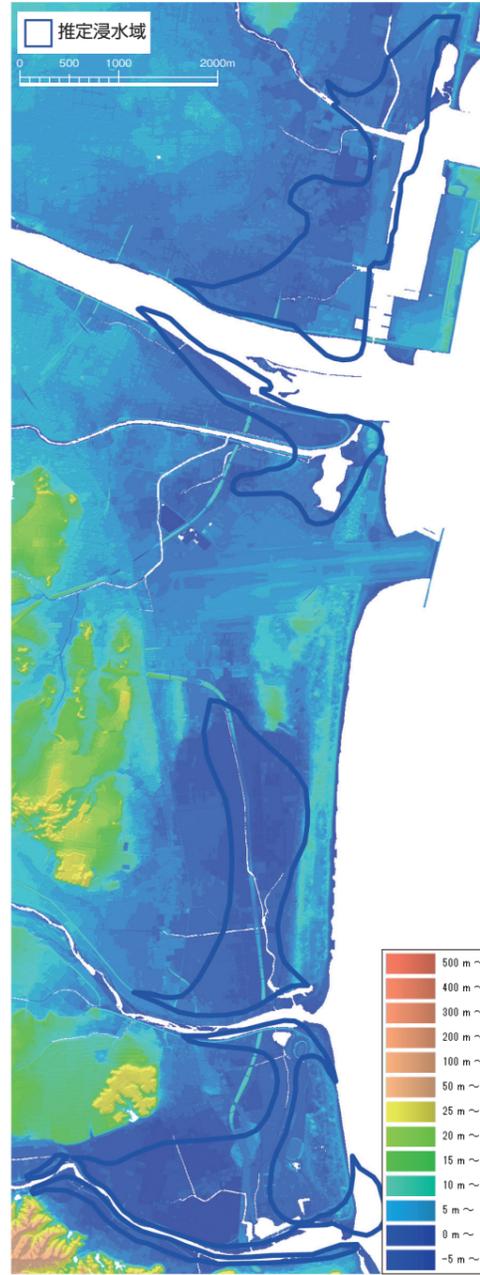
宮崎市「地域防災計画」・総務省統計局「水害統計」より

ハザードマップに記載の浸水想定区域は、実際に災害として起こったものではありませんが、外所地震の津波推定浸水区域と比較することで、実際に津波が発生したときに、影響を受けるのはどの範囲になるかを考える参考になります。

また、色別標高図は、青の色が濃くなると0mに近づくことを示していますので、併せて参考にしてください。



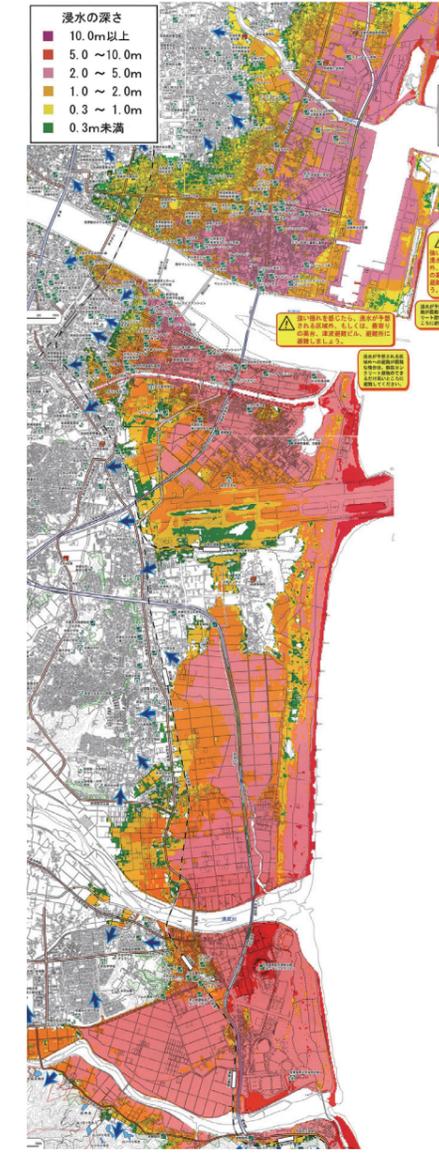
羽鳥徳太郎(1985)九州東部沿岸における歴史津波の現地調査。東京大学地震研究所集報,第60冊,P.444,Fig.5.]より作成



国土地理院「基礎地図情報(数値標高モデル)5mメッシュ」より作成

【参考】

今後考えられる災害の想定については、宮崎市作成の防災マップでご確認ください。



宮崎市「宮崎市津波ハザードマップ」より

外所地震の供養碑

1662(寛文2)年の外所地震は、宮崎市に甚大な被害をもたらしました。この大災害に際し宮崎の人たちは、未来に警鐘を鳴らす事を選択しました。

この地震・津波の被害を後世の人たちに伝えるべく、50年毎に供養碑を建立し続け、350年経った現在でも、その精神は引き継がれています。



現在も花が手向けられています。(2016年9月26日撮影)

5 外所地震の津波被害から農地復興のあゆみ (熊野地区)

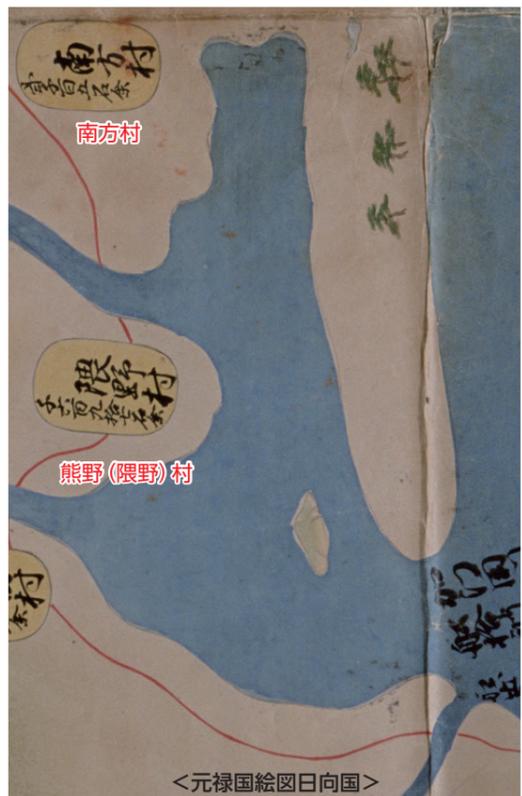
本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情復、第191号)」

1645(正保元)年~1648(正保3)年



宮崎県総合博物館所蔵「正保日向国絵図」より

1696(元禄9)年~1702(元禄15)年



国立公文書館「元禄国絵図・日向国」より

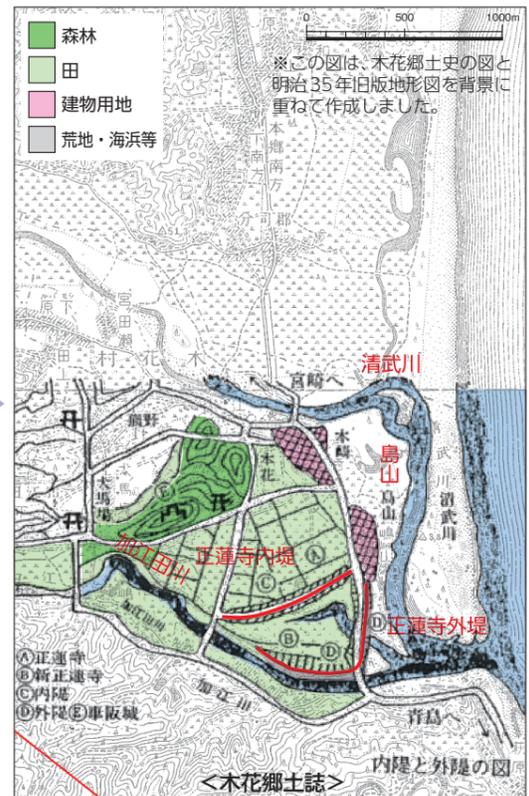
この図は「正保日向国絵図」と呼ばれる図の一部を拡大したものです。

この図は「元禄国絵図日向国」と呼ばれる図の一部を拡大したものです。

外所地震から34年~40年後の作成とされており、右の地図と同じ範囲を切り出しました。

南方村、熊野(隈野)村の東側は巨大な内海として描かれています。

1818(文政元)年~1829(文政12)年



木花振興会「木花郷土誌」(1980)より

寛文2年の外所地震によって、加江田川上流から運ばれた土砂の堆積による三角州正蓮寺平野は「入海」となっていました。その後、入り江の海は洪水毎に土砂が埋積し、しだいに泥沼になっていきます。郷土の人々は、島として残っていた島山を基点にして、外海と区画をする堤防を築きました。

こうして、堤の内側に全面積百二十九町(129ha)の水田がよみがえったのです。

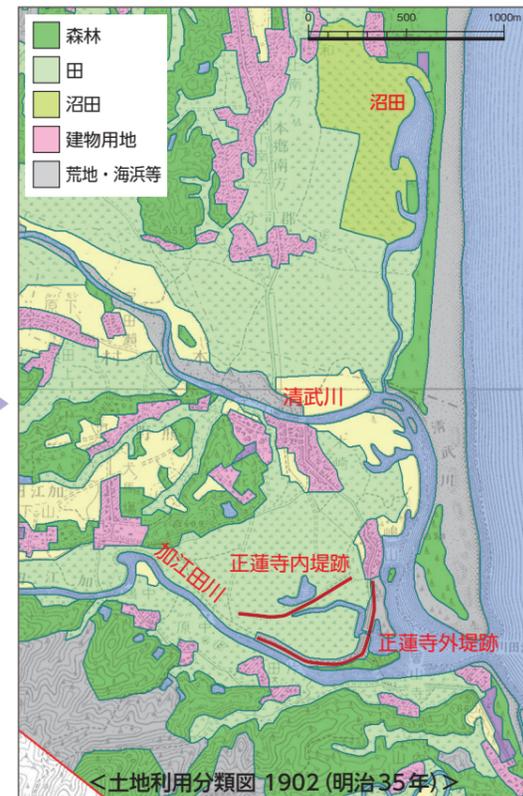
その後、文政年間、島山の杉田新兵衛(新左衛門)がその外側に堤防を築き、これを正蓮寺外堤と言いました。この堤によって不毛の地約六十町(60ha)が美田となり、外所地震で失われた田を取り戻しました。

この二度にわたる大工事は、内堤は19年かかり、外堤は11年間かかって完成しました。

参考: 木花振興会「木花郷土誌」(1980)。

なお、本図の着色は土地利用を土地利用分類図に合わせて着色したものです。

1902(明治35)年



土地利用分類図 1902(明治35年)

明治期の土地利用分類図を見ると、熊野地区の水田は回復され、正蓮寺内堤、外堤ともに確認することができます。

また、北部は「沼田」(泥が深く、ひざまでぬかるような田)として描かれています。

昭和期の土地利用分類図(右上)、現在の航空写真(右下)からは、昭和20年代後半に清武川が再び直接日向灘に注ぐようになり、明治期に加江田川に合流していた水部は「KIRISHIMAヤマザクラ宮崎県総合運動公園」となっているのがわかります。

また、北部に残っていた「沼田」は、昭和期には周囲と変わらない水田となっていました。

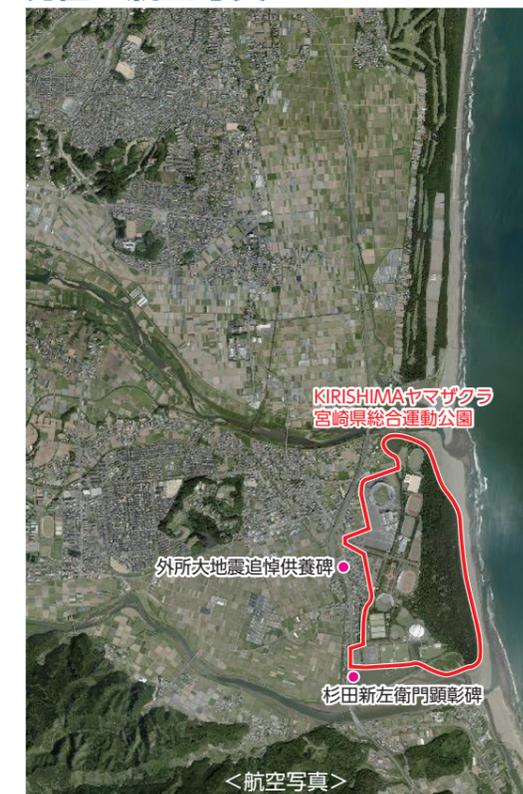
右の航空写真で示した●は、8ページに掲載されている「外所地震の供養碑」と正蓮寺外堤を築き、水田を取り戻した偉業を称えた「杉田新左衛門顕彰碑」の位置を示しています。

1968(昭和43)年



土地利用分類図 1968(昭和43年)

現在の航空写真



国土地理院「地理院地図(地理院タイル)」より



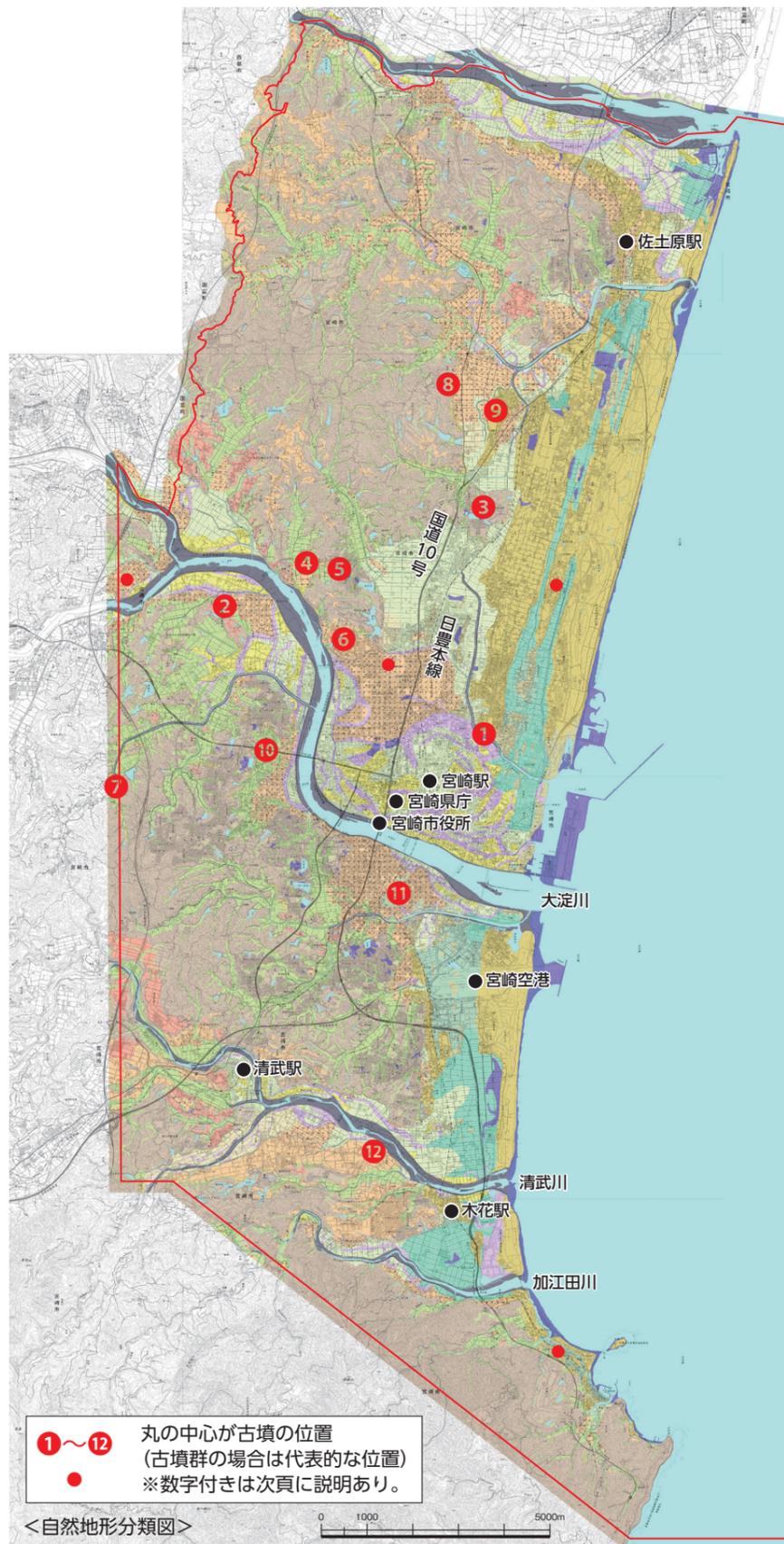
杉田新左衛門顕彰碑 撮影: 大平明夫

6 古墳の分布

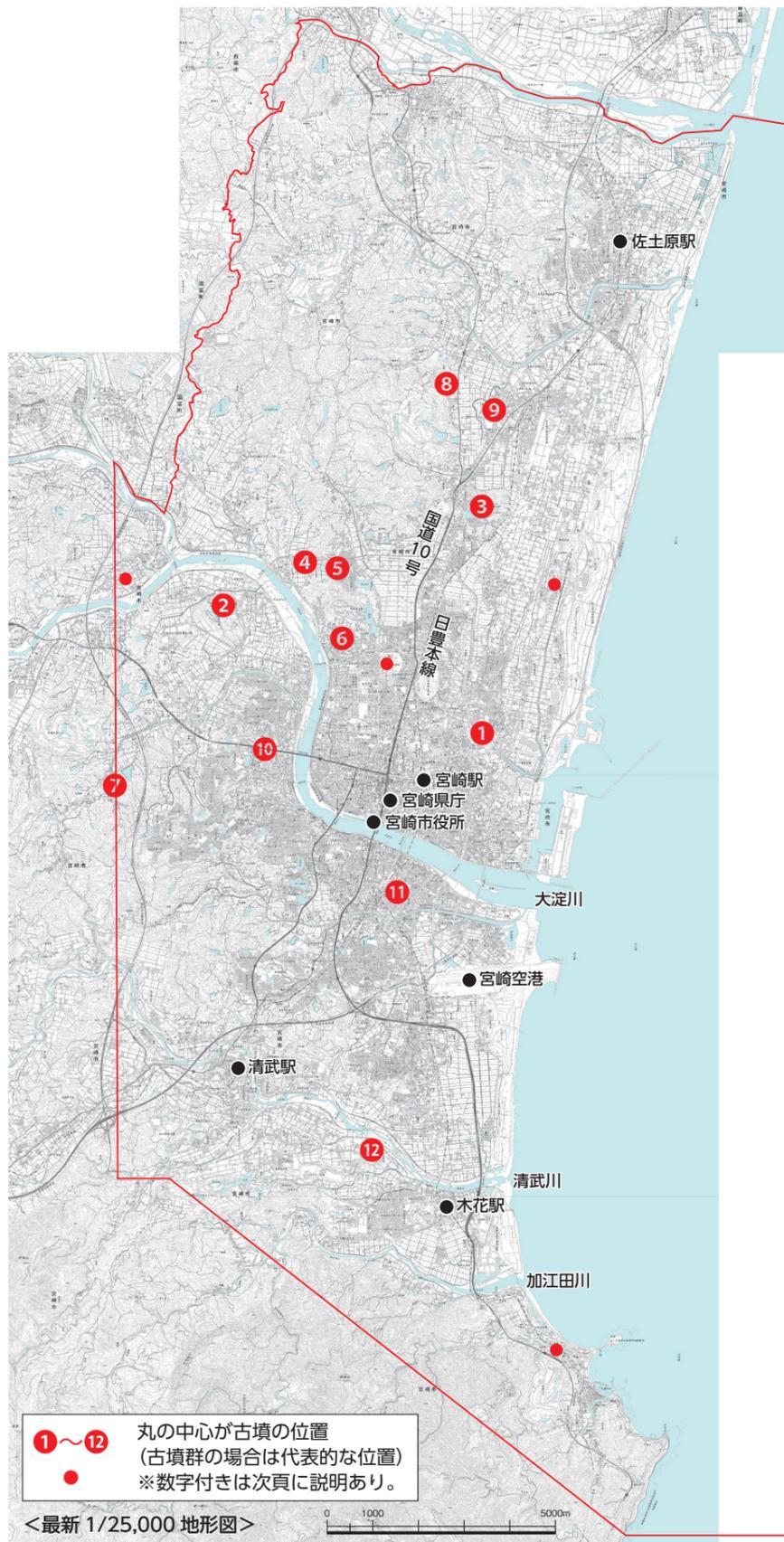
注意
必読のこと

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情複、第1411号)」
※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情複、第191号)」

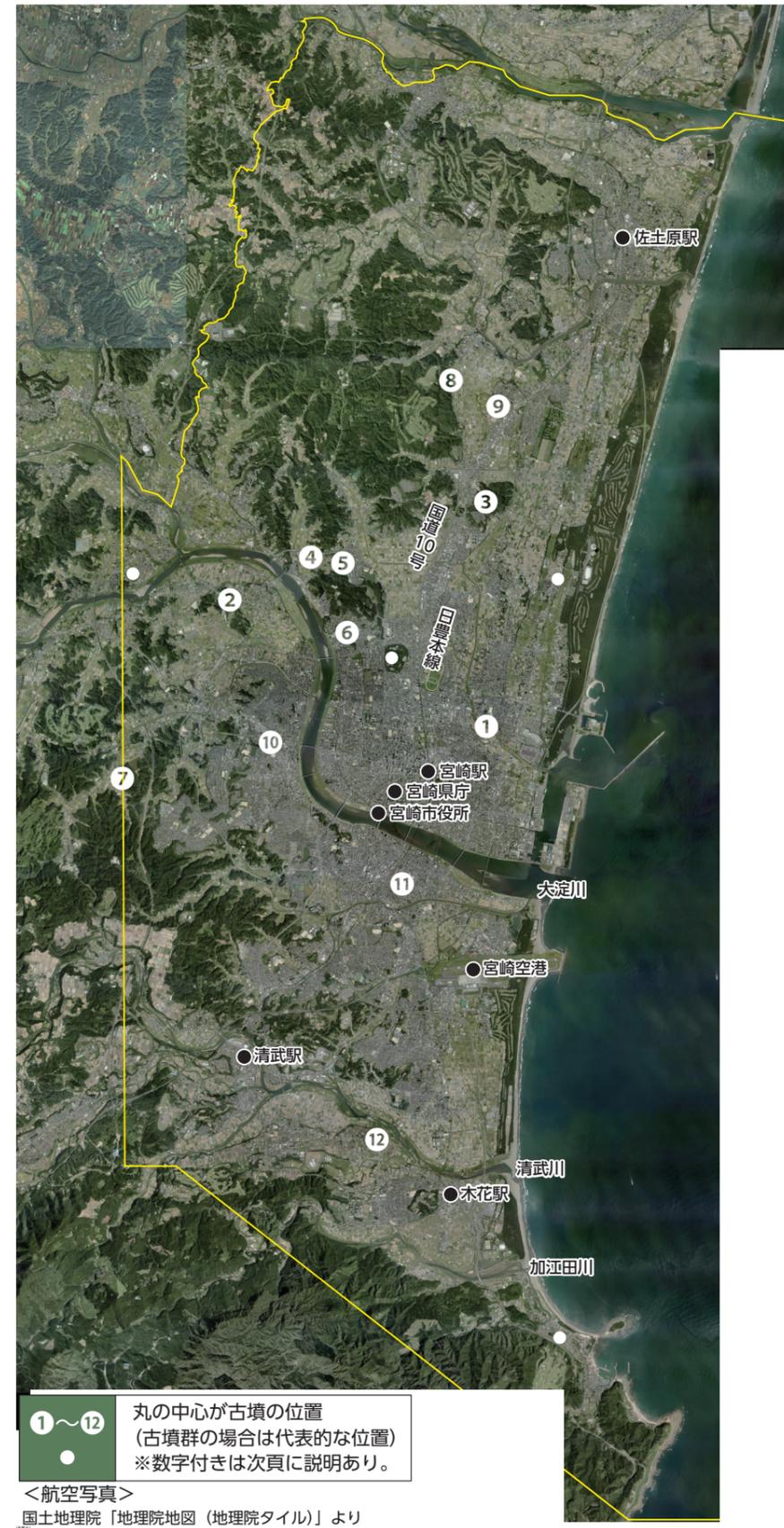
●どのような土地に古墳が作られたかを知ることができます。



●地形図と重ね合わせることで、詳しい場所を知ることができます。



●現在の航空写真から、付近の土地の様子を見ることができます。





注意 本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。

① 櫛古墳群

櫛中学校の南側、新別府川に接する砂丘の先端に位置する前方後円墳です。墳長は52mで、前方部が撥形に開く古墳時代前期の特徴を有しています。



古墳時代
前期 中期 後期

② 生目古墳群

古墳時代前期の長さが100mを越える前方後円墳3基(1号墳、3号墳、22号墳)は、同時期の九州の首長墓でも突出した存在であり、強力な力を持った豪族がこの時期、大淀川下流域にいたことを示しています。



古墳時代
前期 中期 後期

③ 蓮ヶ池横穴群

宮崎平野の西辺の入り組んだ谷間の斜面に、現在82基の横穴が確認されています。玄室の基本形態は寄棟造の妻入りで、構築時の工具痕が美しく残っています。また、53号横穴では、玄室壁面に線刻壁画を見ることができます。



古墳時代
前期 中期 後期

④ 瓜生野村古墳

瓜生野村古墳は、上北方地区と瓜生野地区に分布する高塚墳、横穴群の総称です。現在は円墳2基と横穴31基が確認されています。



古墳時代
前期 中期 後期

⑤ 池内横穴

横穴は、山の斜面に穴を彫り、死者を葬った墓の一種で、古墳時代後期を中心に造られました。大小合わせて33基の横穴がありましたが、4基の代表的な横穴を残し、他の29基は消滅してしまいました。



古墳時代
前期 中期 後期

⑥ 宮崎市下北方古墳

現在は前方後円墳4基、円墳9基を確認することができます。古墳群が立地する丘陵頂部に位置する13号墳は、全長約96mの前方後円墳で、円筒埴輪のほか、南九州では珍しい形象埴輪も出土しています。



古墳時代
前期 中期 後期

⑦ 生目村古墳

現在、細江に円墳が2基、浮田と富吉に横穴13基が確認できます。1967(昭和42)年には未指定の横穴が生目地域センター北側の丘陵で発見され、故石川恒太郎氏らによって調査されています。



古墳時代
前期 中期 後期

⑧ 広原横穴第1号

この横穴の玄室の側壁には、線刻壁画が描かれています。東側壁に9体の人物像、西側壁に2体の人物像などが描かれています。壁画の構成に、葬列を推測させるような特異性が見受けられます。



古墳時代
前期 中期 後期

⑨ 住吉村古墳

現在は島之内の前方後円墳1基と芳士・広原地区の横穴40基が確認できます。全長67mの前方後円墳である1号墳からは、円筒埴輪が採集されています。



古墳時代
前期 中期 後期

⑩ 宮崎市大淀古墳

宮崎市大淀古墳は、大淀川の右岸、標高7～8mの低地帯に位置しています。大塚の地名は、古くは「大墓」とも書き、「数多くの古墳」という意味に由来していると言われています。



古墳時代
前期 中期 後期

⑪ 赤江町古墳

1933(昭和8)年の県史跡指定時には3基の古墳がありましたが、現在確認できるのはこの円墳1基のみとなっています。『日向地誌』には「福長院塚」とありますが、かつては側に霧島小祠が祀ってあったため、別名霧島塚とも呼ばれています。



古墳時代
前期 中期 後期

⑫ 木花村古墳

前方後円墳2基(1号墳と2号墳)と円墳1基(4号墳)が現存します。『木花郷土誌』によれば、昭和の初期、後円部とくびれ部の境から石棺が発見され、鉄刀が出土したとあり、近年、後円部で片面に赤色顔料を塗布した板石が確認されていることから、石棺は板石組合せの箱形構造と考えられます。



古墳時代
前期 中期 後期

7 水運の中心から空の玄関口へ (赤江地区)

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の活用に当たっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。

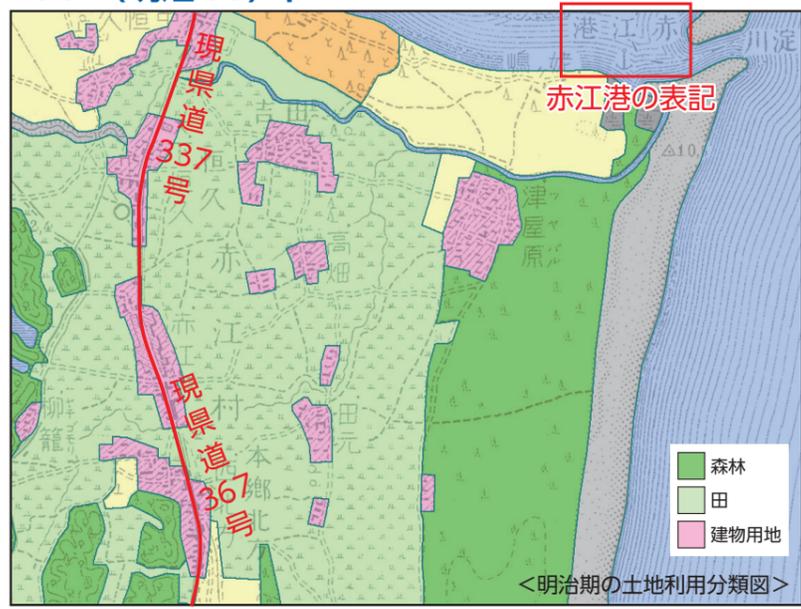
※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。

※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情複、第191号)」

※「この空中写真は、国土地理院長の承認を得て、同院及び米軍撮影の空中写真を複製したものである。(承認番号 平成29情複、第191号)」

注意
必読のこと

1902 (明治35) 年



赤江地区は、大淀川河口に赤江港 (後の宮崎港) の表記ができるように、当時は水運の拠点であったことがわかります。海沿いには森林 (砂丘) が、内陸側には水田が広がり、南に向かう主要道路 (現在の県道337・367号) が通っています。

1945 (昭和20) 年



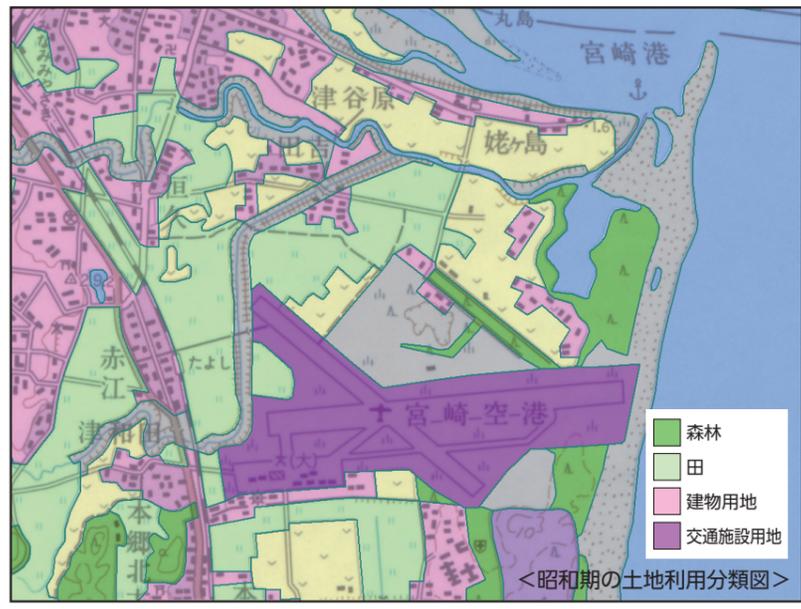
この地図は、旧米国陸軍地図局により作成された日本主要都市の市街地地図です。戦時中に日本海軍が使用した、赤江飛行場 (現宮崎空港) が掲載されています。この赤江飛行場は浚渫で吸い上げた土砂で埋め立てて作られました。その吸い上げられた跡が津屋原の沼です。

1952 (昭和27) 年



米軍により撮影された赤江地区の航空写真です。

1968 (昭和43) 年



宮崎空港はこの頃に滑走路の延長が1,800mとなり、地方空港としては初めてジェット機が就航を始めました。JR宮崎空港線はまだありませんでした。

最新の航空写真



宮崎空港は海岸が埋め立てられ、滑走路は2,500mになりました。国内各地への路線はもとより、国際線も就航しており、JR宮崎空港線と併せて宮崎の玄関口となっています。なお、写真の印は掩体壕の残っている位置を示しています。

今も残る掩体壕 (えんたいごう)

空港隣接の農地には、現在も掩体壕と呼ばれる施設が残っています。これは、戦時中に軍用航空機を爆撃から守るためのシェルターとして、戦闘機や爆撃機を格納していました。

写真は戦闘機等のための小型のものですが、現在の本郷地域周辺には大型機を格納していた掩体壕も現存し、これらは車庫や農機具倉庫として利用されているものもあります。

左図の掩体壕枠の範囲を拡大
国土地理院「地理院地図(地理院タイル)」より

小型の掩体壕(2016年12月20日撮影)

8 旧河道、旧水部と災害の関係

本資料中の説明は、あくまでも読図の一例であって、確定的な分析ではありません。実際の利活用にあたっては、地元の地形・地質や防災等に詳しい専門家の助言や監修を受けるようにしてください。
 ※「明治35年=1902年」、「昭和43年=1968年」の表記は時代の目安であり、使用されている各地図はおおむねその前後の時期のものであります。
 ※「この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000(土地条件)及び基礎地図情報を使用した。(承認番号 平28情使、第1169号)」
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平28情複、第1411号)」
 ※「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1地形図及び電子地形図(タイル)を複製したものである。(承認番号 平29情複、第191号)」

注意
 必読のこと

1 中央地域の旧河道

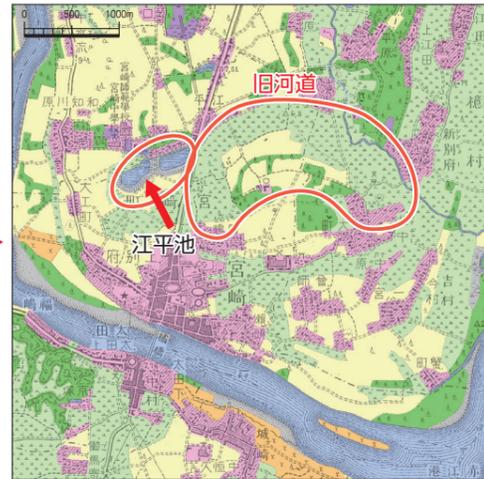
自然地形分類図の旧河道



<自然地形分類図>

宮崎市の市街地には、かつての大淀川が流れていた跡や、その一部が池として利用されていた場所があります。この池は旧河道のくぼ地を利用して作られたと思われます。

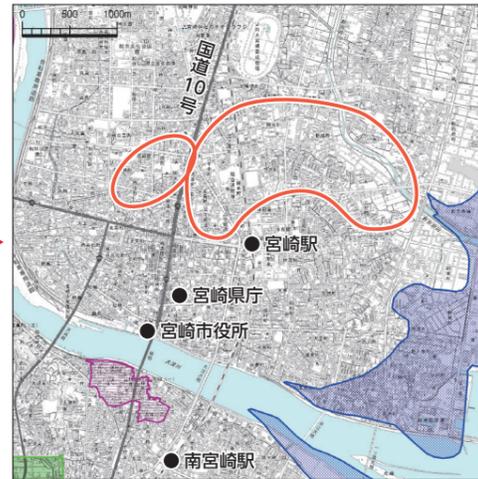
明治期の地形図上の旧河道



<明治期の土地利用分類図>

かつて江平池と呼ばれた2つの池が確認できます。それぞれ江平東池と江平西池と呼ばれ、東池は昭和4年～7年頃に、西池は昭和30年頃に埋め立てられました。また、その東に続く田が旧河道です。

現在の地形図上の旧河道

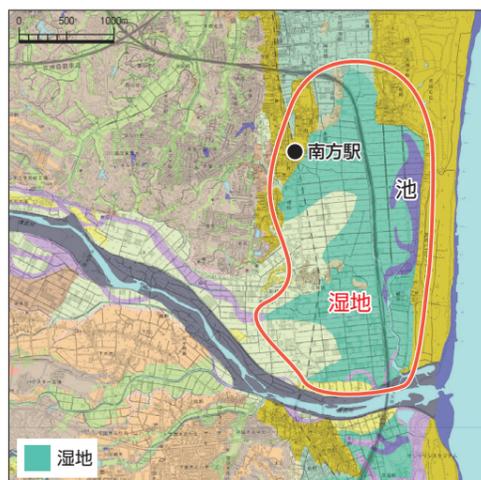


<災害履歴図>

江平池のあった場所が小中学校となり、旧河道も盛土され、市街化されています。これらの小中学校は宮崎市によって耐震化工事が行われました。

2 本郷地域の旧水部

自然地形分類図の湿地

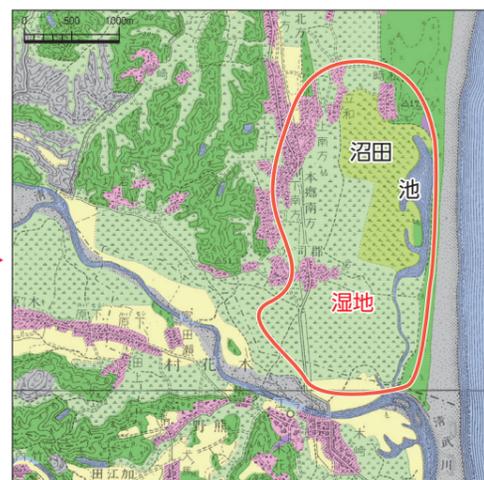


<自然地形分類図>

宮崎空港の南には、湿地や池だったところが見られます。この地区は外所地震以降、「元禄国絵図日向国」で入り江として描かれた範囲の一部に相当します。

外所地震後の農地復興のあゆみについては9ページへ➡

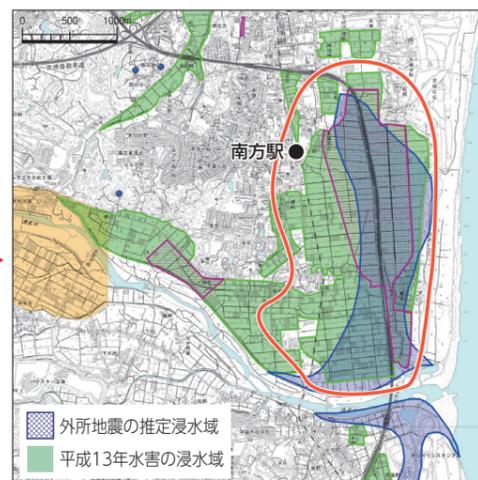
明治期の地形図上の湿地



<明治期の土地利用分類図>

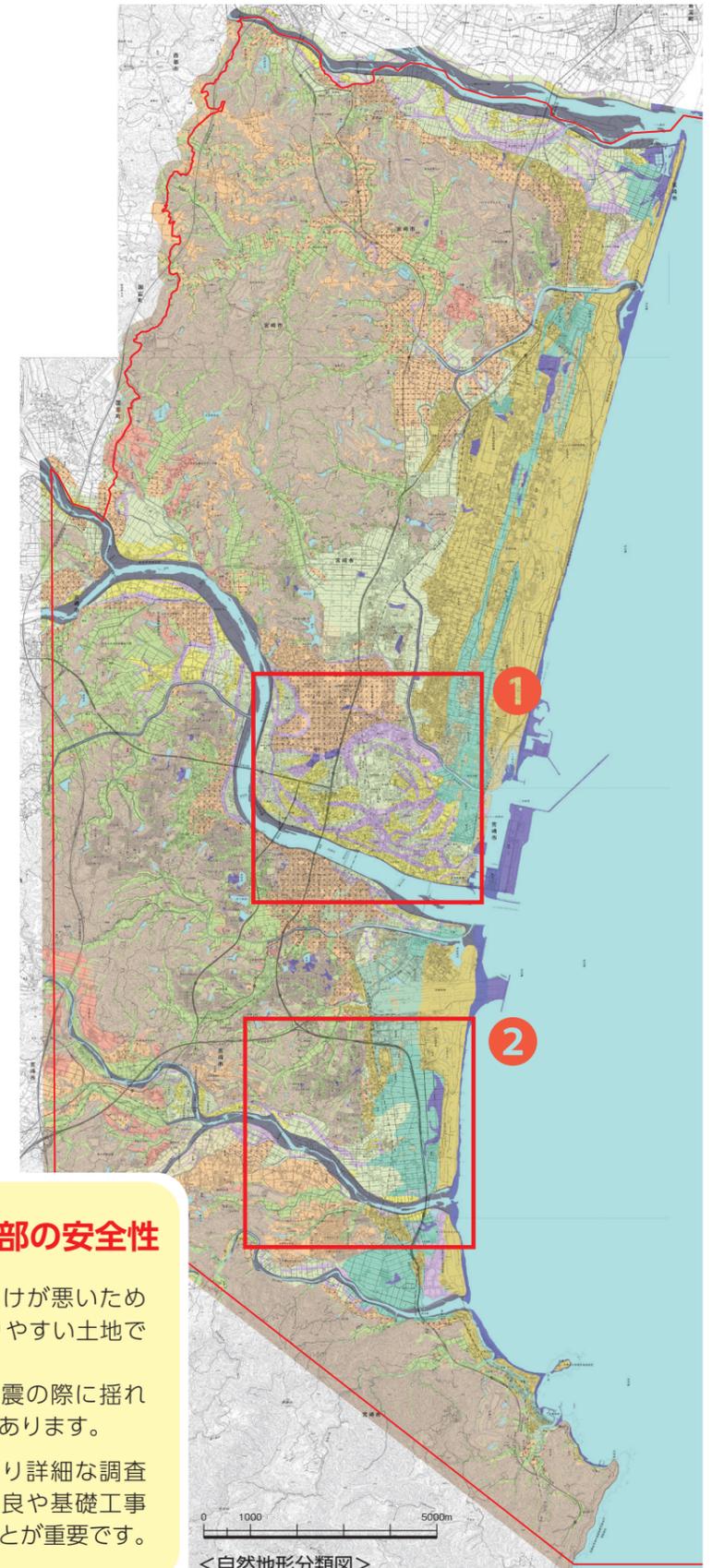
湿地や沼田の表記がされ、池も描かれていることが確認できます。

現在の地形図上の湿地



<災害履歴図>

現在もほとんどが水田として利用されていますが、平成13年、平成17年の水害でも浸水している地区ですので、現在も水が溜まりやすい土地と考えられます。



旧河道、旧水部の安全性

旧河道・旧水部は水はげが悪いため大雨などで水がたまりやすい土地です。

また、地盤が軟弱で地震の際に揺れが大きくなる可能性があります。

建物を建てる際は、より詳細な調査を行い、最適な地盤改良や基礎工事などの対策を考えることが重要です。

<自然地形分類図>

では、どうやって活用するのでしょうか — 利活用のロードマップ

利活用先をきめる

- ①都市計画・地域計画
- ②地域防災計画
- ③環境保全
- ④観光情報
- ⑤学習教材
- ⑥地方創生の検討

データの収集



GISによる加工



住民の利用シーンとしては

アウトプット例

①スマートフォン・タブレット



②大判の図面

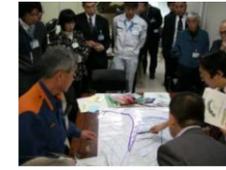


③パンフレットやハザードマップなど



①都市計画・地域計画への活用

- ・安全な地域への施設の誘導
 - ・用途地域変更等の検討資料
 - ・重要施設の立地選定
 - ・都市計画手続きなどの行政事務の効率化
- など



②地域防災計画・避難訓練への活用

- ・避難行動要支援者の避難計画立案
 - ・防災訓練等での図上訓練
 - ・地域住民への防災意識向上のための資料
 - ・適切な避難所等の選定
- など



③環境や文化財保全への活用

- ・景観保護等の検討資料
 - ・アセスメント調査への利活用
 - ・モニタリングのデータベース
- など



④観光情報・歴史的資料の発掘

- ・まちづくりへの利活用
 - ・景観や風光明媚な場所の発見
 - ・観光客への情報発信
 - ・観光資源の情報提供
- など



⑤学習教材への活用

- ・ハザードマップ等による防災教育
 - ・通学路の危険な地点の周知
 - ・地域学習での利活用
 - ・避難場所・避難路の確認
- など



⑥地方創生への寄与

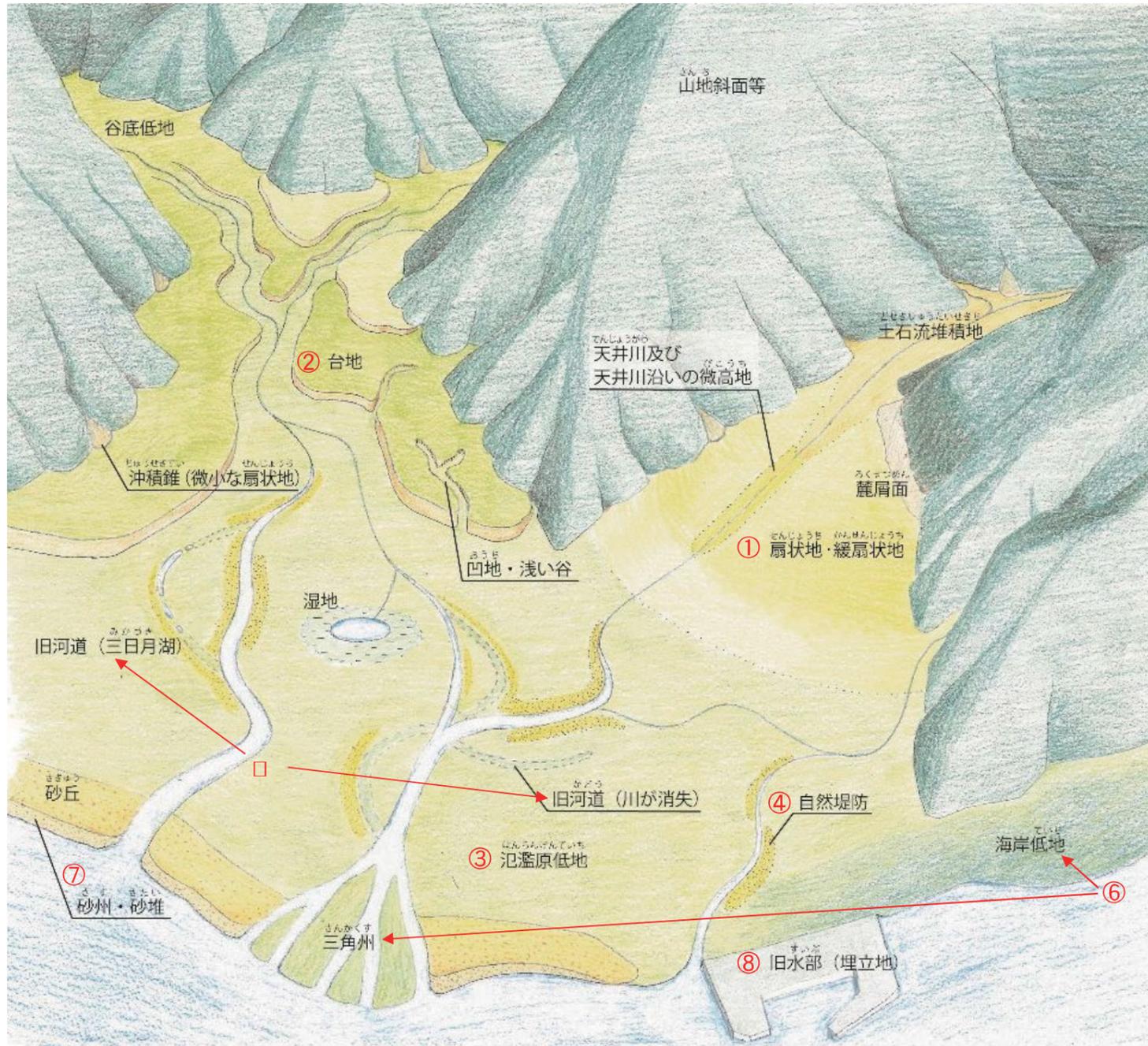
- ・地域の特性を生かした産業立地
 - ・エリアマーケティングでの活用
 - ・福祉施設(バリアフリー等)の位置情報提供
- など



インターネットでデータを入力

- 国土交通省 国土政策局 国土情報課
[http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/land history_2011/index.php](http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/land%20history_2011/index.php)
 あるいは『土地履歴調査』でネット検索
- 国土地理院(災害関連) <http://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>
- 産業技術総合研究所(地質調査総合センター) <https://www.gsj.jp/> など

【地形用語とその概略図】



① 緩扇状地

川によって運ばれてきた土砂が山から平野に移る谷の出口などに積み重なってできた扇状の土地で、一定方向に傾斜しており、表面の傾斜が比較的緩やかなところを緩扇状地という。

(水害) 集中豪雨などでは水につかる場合があるが、水はけはよい。

(地震災害) 扇状地の末端のところで液状化現象が発生しやすい。

② 台地

土地の表面が平坦で、縁を崖で限られた台状または階段状の地域で、表面に覆われた土砂などの性質や厚さなどにより、岩石台地、砂礫台地、ローム台地等に区分される。

(水害) 集中豪雨などで水に浸かる可能性は少ないが、低地と高さの差がない低い台地では、水に浸かることがある。また、台地上で周囲より低いところでは雨水をはけきらずに水が集まる場合がある。

(地震災害) 低地に比べて土は硬く揺れは大きくならないが、縁辺の崖や斜面の急なところでは崖や斜面が崩れる可能性がある。

③ 氾濫原低地

川によって運ばれた土砂などが積み重なってつくられた広く開けた平坦な土地で、自然堤防や旧河道、湿地などを除いた低地。

(水害) 川の氾濫や豪雨、高潮などによる水害が発生しやすく、長期間にわたって水に浸かることもある。

(地震災害) 地震による揺れ幅は大きく、自然堤防の周辺や旧河道など砂が緩く積み重なっているところでは液状化現象が発生しやすい。

④ 自然堤防

川の流れによってつくられた土地で、川の流路に沿って川が運んだ土砂などが積み重なってつくられた周囲よりわずかに高い土地。

(水害) 洪水のときに水に浸かっても、周囲の氾濫原低地や旧河道より高いため、水深は浅く水はけもよい。

(地震災害) それほど高くない新しい自然堤防や、自然堤防と氾濫原低地の境界付近では揺れ幅が大きく、液状化現象が発生しやすい。

⑤ 旧河道

現在川は流れていないが、過去に川が流れていたところで、周辺と比べるとやや低い土地が帯のように連なっているところ。

(水害) 洪水のときに水の通り道となる場合があり、水に浸かったときは長時間にわたって水がとどまることがある。旧河道と交差する堤防は破堤などの注意を要する。

(地震災害) 低地の中でも揺れ幅が大きく、新しい旧河道ほど液状化現象が発生しやすい。

⑥ 三角州・海岸低地

三角州は河口付近に広がる細粒の砂や粘土などが積み重なってつくられた平坦な土地。海岸低地は浅い海に積もった土砂が、海水の後退や土地の上昇により陸地化した平坦な土地。

(水害) 高潮による被害を受けることが多い。水に浸かった場合、浸かったままの状態が長く続くことがある。

(地震災害) 地震のときに揺れ幅が大きくなり、液状化現象が発生しやすく、津波によって水に浸かる場合がある。

⑦ 砂州・砂堆

現在または過去の海岸付近で、水の流れや波の動きによってつくられた砂または小石からなる周囲よりわずかに高い土地。

(水害) 高度の低いところでは河川の氾濫や豪雨、高潮などで水に浸かる場合があるが、水はけはよい。

(地震災害) 地震のときは揺れ幅が大きくなり、砂州と砂州の間の低地では液状化現象が発生しやすい。

⑧ 旧水部(干拓地、埋立地)

かつての海や池、沼などで、干拓や埋め立てなどによって人工的に陸地化され、水面が現存しないもの。

(水害) 高潮による被害を受けることが多い。

(地震災害) 液状化現象が発生しやすい。

【凡例の解説】

自然地形分類

分類	解説	
山地斜面	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	火山地斜面等	第四紀火山噴出物からなる火山地または火山丘陵地の斜面等をいう。火砕流や溶岩の堆積地、火山体の開析により形成される火山麓扇状地または泥流堆積地等の火山麓地を含む。
	麓屑面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	岩石台地	地表の平坦な台状または段丘状の地域で、基盤岩が出ているかまたはきわめて薄い未固結堆積物でおおわれているもの。隆起サンゴ礁台地を含む。
	砂礫台地（更新世 ^{*1} 段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世 ^{*2} 段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、 形成時期が新しく 、未固結の砂礫層からなるもの。
	ローム台地	地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚いローム層（火山灰質粘性土）からなるもの。
低地	扇状地	山麓部にあって、主として砂や礫からなる扇状の堆積地域。
	緩扇状地	傾斜の緩やかな扇状地。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。いわゆる「谷底」。
	氾濫原低地	扇状地と三角州・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された 広く開けた平坦地 で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	三角州・海岸低地	河口における河川の堆積作用で形成された低平地や、過去の浅海堆積面が海堆により陸化した平坦地。
	砂州・砂堆・砂州・砂堆	現在の海岸及び過去の海岸や湖岸付近にあって、波浪や沿岸流によってできた砂または礫からなる 微高地 。
	砂丘	風によって生じた 、砂からなる波状の 堆積地形 。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周辺の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。	
浜	汀線付近の砂や礫で覆われた平坦地（砂浜及び礫浜）をいい、人工改変地内の旧浜を含む。	
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、 現存しないもの 。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

※1 更新世：約 258 万 8 千年前から約 1 万 1700 年前までの期間

※2 完新世：約 1 万 1700 年前から現在までの期間

人工地形分類

大分類	小分類	解説
人工平坦化地（切り盛り造成地）	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて 存在した谷線 。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に 0.5m 以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てして造成された土地。
干拓地		水部や干潟、湿地等を堤防で締め切り、 排水することによって陸化した低い土地 。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

土地利用分類

分類	解説
田	水稻、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、 ひざまでぬかるような田 （この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上 の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地 からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで 植物に覆われていない土地 。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの 排水の悪い土地 で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

災害履歴調査の主な調査内容

災害種別	主な調査内容
水害	・台風、集中豪雨、長雨、融雪等による洪水の 浸水範囲 ・台風、集中豪雨、長雨、融雪等による 堤防決壊箇所 ・高潮、異常潮位による 浸水区域 ・高潮、異常潮位による 破堤箇所 等
土砂災害	・斜面崩壊または崖ずれの 発生範囲 及び 被害区域 の分布 ・地すべりの 発生範囲 及び 被害区域 の分布 ・斜面崩壊等の発生によって生じた堰き止め（河道閉塞による湛水）等の状況と二次災害の 発生範囲 ・土石流等が発生した 溪流 、 土石流堆積物 及び 被害区域 の分布 等
地震災害	・建築物の 倒壊区域 の範囲 ・土木構造物の 損壊箇所 ・液状化による地割れや地盤変位、噴砂・噴泥等の 発生範囲 ・地震に起因する 斜面崩壊・地すべり 等土砂災害の分布 ・ 地震断層 の分布 ・地震に起因する 火災等 の二次災害分布 ・津波の 遡上範囲 及び 遡上高 等
地盤沈下災害	・地盤沈下観測点、 累年観測値 等
火山災害	・降灰・噴石、溶岩流、火砕流、山体崩壊・岩屑なだれ、これらに起因する津波、火山泥流（土石流）等の分布 等

調査成果の利活用事例集（案） （宮崎地区）

平成 29 年 3 月 3 日

問合せ先

（受託者）昇寿チャート株式会社

（委託元）国土交通省 国土政策局 国土情報課 国土調査担当

TEL：03-5253-8353（直通） FAX：03-5253-1569